

西之表市・伊佐市交流事業  
戦後70年学童疎開記念誌

# つなぐ

語り継ぎたい  
想い



<協 力>

題字：大木クリ子（西之表市）

表紙絵・挿絵：村木直行（伊佐市）

DVD動画：種子島高等学校（西之表市）

シンボルマーク：大口明光学園中学校・高等学校（伊佐市）

写真：古賀写真館（西之表市）

資料：種子島開発総合センター（西之表市）

菱刈郷土資料館（伊佐市）

<お断り>

本誌において、国民学校初等科については、「小学校」での表記を行っています。



姉妹都市交流

「西之表市と伊佐市の友情を未来につなぐ」

シンボルマーク

## 発行に寄せて

戦後70年の節目を迎えた平成27年（2015年）。

マスコミでも様々な「戦争」特集が生まれ、日本で起きた歴史的事実を見つめ直す機会となりました。

戦時中の西之表市と伊佐市（大口市・菱刈町）は、「学童疎開」という、つらく悲しい出来事で繋がります。親元を離れ、心細かったであろう西之表市の2838名の疎開児童。自らが生きていくだけで精一杯の時代に、見ず知らずの子どもを受け入れた伊佐市の受入家庭。どちらの立場を思っても、胸が苦しくなります。

しかし、戦争・疎開という苦しい時代を共に生き抜いた絆は、昭和37年に「姉妹都市盟約締結」という実を結び、これまで53年の長きにわたり市民交流・行政交流として、友情を育んできました。

戦後70年、戦争体験者の高齢化は進み、戦後生まれが大半を占める時代となりました。「戦争や疎開という悲劇を、二度と起こしてはならない」「忘れてほしくない。」という体験者の声を、書き留め、語り継ぐ必要がある――。

そんな「つなぐ」という想いを込め、西之表市と伊佐市共同による記念誌をここに発行します。



## もくじ

### 1 【市長対談】戦後 70 年を語る

5 戦争に向かった背景・状況

11 当時の様子を伝える品々

15 疎開の状況（地図）

### 17 疎開体験談【西之表市】

70 年の時を超え…

33 『再会』の旅が始まる

### 45 疎開体験談【伊佐市】

59 疎開受入に対するお礼状

61 姉妹都市盟約の締結

63 「語り継ぐ あの時を」

65 「心の架け橋」 伊佐市教育長

### 67 「DVD 動画」制作

### 71 「シンボルマーク」作成

73 学校交流

79 「未来へ」 西之表市教育長

81 市職員による交流

83 伊佐市広報紙「戦後 70 年」特集

87 西之表市の概要

89 伊佐市の概要

## 【市長対談】戦後70年を語る

記念誌の発行にあたり、長野 力市長（西之表市）と隈元 新市長（伊佐市）が対談を行いました。

戦後70年、薄れゆく戦争の記憶と苦難の時を共に過ごした人々の絆について想いを語ります。

### 学童疎開の話が聞かれたことはありませんか

長野 私自身は学童疎開を経験していませんが、地域の方から聞いたことがあります。当時は食べる物が少なく、いつもお腹を空かせていたとか。栄養・衛生状態は大変悪く、病気も流行ったと聞いています。疎開経験者のご苦勞を、話だけで理解するのは容易なことではありません。我々の想像を超えるご苦勞があったらと思う思います。

隈元 私の実家は、受入家庭ではありませんでしたが、地元では疎開児童を受け入れていました。学童疎開については、議員時代や市長になってから、互いのまちの交流を通して、話を聞いたり文献を読んだりし



▲ 伊佐市役所での対談（平成 27 年 11 月 22 日）

て学びました。西之表市の落合浩英前市長も学童疎開で西太良地区（現・伊佐市大口曾木）に来られたと伺いました。私が議員だった20数年前は、寄り合いの席で学童疎開の話が頻繁に出ていました。今思えば、体験者は当時50代ですから、いろいろな場面で話す機会が多い世代だったのでしようね。70年経って当時のことを聞くことはかなり減りました。

小学2～6年生の児童が親元を離れて暮らす――

どれほどの淋しさがあったのでしょうかね

隈元 昭和20年の3月頃から空襲が激しくなつたと聞いたので、生きるか死ぬか切羽詰まった状態で島を離れるしかなかったのでしょうかね。

疎開体験者からは、「受入家庭の皆さんに家族のように接してもらつた」と感謝の言葉が聞かれますが、モノのない競い合いの時代に疎外感を感じることもあつたのではないのでしょうか。

長野 疎開児童に関わらず、昔は子ども同士の競い合いは日常的にありましたから、逆にいうと、そういうこ

とが親しくなるきっかけになつたし、一緒に生活して苦しかったことも、時間とともに楽しかった思い出になつたのではないのでしょうか。

隈元 そうですね。子どもたちは集団で疎開しましたから、淋しさの中にも少し旅するような気持ちがあつたかもしれませんね。疎開児童の親は、敵が島に上陸すれば自身も生きていられるか不安の中、「子どもだけでも」という思いだつたのでしょうか。

長野 昔は貨物船でしょうから、島を出るのは大変なことだつたと思います。親は最後の別れのつもりで送り出していたかもしれませぬ。戦後だいぶ経つてから、私も島を出て進学・就職しましたが、島の外はどんな所なのか不安だつたのを覚えています。

隈元 伊佐市は当時6町村（伊佐郡）でしたから、それぞれのまちに首長がいたわけです。そんな中、約2800名もの児童を受け入れる体制がよくできたなど驚きます。連携がうまくとれていたのか、それとも時代が有無を言わさずそうさせたのか。

長野 国の方針に従って覚悟を決めていたのでしょうね。「子どもだけは生きてくれ」という気持ちで家族にあったとすれば、子孫を残すための親の覚悟は素晴らしいです。

2つのまちが学童疎開で出会い、  
その縁が姉妹都市盟約に繋がったわけですよ

長野 今では想像できない大変な生活の中で、病気になった疎開児童にも家族のような介護をしてくれて大事にされたと聞きました。モノではない心の繋がりが深くあったでしょう。

隈元 姉妹都市盟約を結んだことを市民に伝えることで、学童疎開についても広く知られるきっかけになったのではないのでしょうか。このことがなければ、歴史の中に埋もれていたかもしれません。

長野 そうですね。こうして歴史が受け継がれているわけですから、姉妹都市盟約を結んでいただいたことに感謝しています。

23年前の今日（11月22日）は、姉妹都市盟約30周年記念式典を行った日です。偶然か必然なのか今日、市長対談できたことにご縁を感じます

今回の記念誌は、記録として残すだけでなく後世に伝える役目もあります。そこで次代を担う両市の高校生にも携わってもらい「70年ぶりの再会をテーマにしたDVD動画」と「友好関係を象徴するシンボルマーク」が完成しました。ご覧になっていかがですか

隈元 —DVD動画—

（関連記事67ページ）

再会の瞬間に立ち会った高校生の感情の動きが映像とナレーションでよく伝わります。対象的なまちの特徴も海や田畑で表現され素晴らしいですね。再会の場面は思わず目が潤みました。

長野 —シンボルマーク—

（関連記事71ページ）

デザインと一緒に書かれている作品の意図を読むとまちの特徴や歴史を踏まえ、考えられた作品であることがよくわかります。両市を象徴する花の優しさ、握手しているようなリボンが友好関係をイメージさせて、いいですね。



この記念誌には、これまでの歴史や学童疎開を知る方々の体験談などを掲載しています。また、高校生の作品が添えられることで、悲しい戦争の歴史を振り返るだけでなく、未来へ繋がる一冊に仕上がったのではないのでしょうか

悲しい歴史に触れながらも互いに感謝し尊敬する気持ちがあつて、終始なごやかな対談になりました。ここに集められた情報と語り部<sup>かたべ</sup>たちの思いよ、次代へ――。

隈元 当時のことを語り継ぐためには今年を逃してはいけないと思いましたがね。70年の節目だからこそ今残さなくては、次の10年では当時を知る人も少なくなつてしまいます。私の息子も「青少年の翼」などの交流事業に参加し、かけがえのない出会いと学びを体感しました。これからの人たちに縁と絆を引き継いでもらいたいです。

長野 歴史の事実から前に進むにはこれからの若い人たちに任せるしかありませんから――。両市の繋がりをより一層深め、友好的な関係が続けてほしいですね。節目の今年子どもたちの交流も盛んに行われました。歴史を学んだ子どもたちが、この記念誌で何かを感じ次の世代に語り継いでくれればと思います。



伊佐市

隈元 新 市長

西之表市

長野 力 市長

# 戦争に向かった背景・状況

## 【国内】太平洋戦争の過程

第二次世界大戦中の昭和15年7月、長期化した日中戦争を有利に終結させるため、方策を探っていた日本軍は「基本国策要綱」を閣議決定し、インドシナ北部の進駐を強行、ほぼ同時に日独伊三国同盟を締結し、アメリカを仮想敵国とする姿勢を明確にしました。

これに反発したアメリカが日本に対する経済制裁を強化したため、関係打開に向けて日米交渉が始まりましたが交渉は難航。時の第三次近衛内閣は戦争回避の可能性を探っていま



▲真珠湾攻撃（昭和16年12月8日）

昭和16年 (1941年)	昭和17年 (1942年)	昭和18年 (1943年)	昭和19年 (1944年)
4月1日	1月18日	7月1日	1月26日
各小学校、国民学校と改称される	ベルリンで、日独伊軍事協定調印 (米国の西海岸を日本、東海岸を独伊の作戦地域と決定) 国民総動員法に基づき、繊維製品の配給制度実施	東京に、初の空襲警報発令 日本軍が、ビルマのマンダレーを占領 家庭用品の配給制度実施される	東京・名古屋で初の疎開命令
日本軍のマレー半島上陸および真珠湾攻撃で太平洋戦争が開戦する。日本、対米英宣戦布告		国民徴用令改正公布 勤労挺身隊(25歳未満女子)の動員開始 御前会議にて「今後執るべき戦争指導の大綱」を決定 絶対国防圏設定	徴兵年齢を1歳引き下げ、満19歳からとする



したが、開戦強硬派の陸軍大臣東条英機ら軍部の主張に押され総辞職し、東条内閣が成立しました。

その後、アメリカからの最後通告が示されましたが、日本軍はこれを受け入れず、12月1日の御前会議で天皇の裁可を得て、12月8日、日本軍の真珠湾攻撃からアメリカ、イギリスなどの連合国軍との戦争が始まりました。

開戦当初こそ日本軍は各地で勝利しましたが、昭和17年6月のミッドウェー海戦から制海権を失った日本軍が次第に後退、米軍の反撃が進みました。長引く戦争は、都市部のみならず日本全土で、いつ来るともしれない空襲に怯える日々を国民に強いることになりました。



▲空を埋め尽くす無数の戦闘機

昭和20年 (1945年)	
3月3日	政府が三綱領発表 (国民学校学童給食・空地利用食糧増進・疎開促進)
3月27日	<b>初の疎開列車</b> (夜に上野発、上越・常磐・東北へ) 人手不足の種子島に学徒動員。県下9つの農学校生徒735人を5班に分けて、農作業に奉仕
4月	<b>B・29の本土初空襲</b> (北九州八幡) 種子島島内学童の集団疎開計画成る
6月15日	沖繩からの疎開船「対馬丸」が米潜水艦の魚雷攻撃により沈没(学童約700人を含む、約1500人が死亡)
7月17日	米国機動部隊、 <b>沖繩本島を空襲</b>
8月22日	西之表に特設警備大隊駐屯、のち特設連隊と増強される
10月10日	<b>B・29の東京初空襲</b>
11月	米軍、硫黄島に上陸(硫黄島の戦い開始)
11月24日	<b>東京大空襲</b> (死者約10万人) 午後1時より午後4時まで、グラマン戦闘機延12機、西之表地区を爆撃銃撃す(死亡) 軍人3人、市民3人(負傷) 軍人10人、市民9人、(行方不明) 軍人4人 市民13人、(住家の全焼) 62棟、(非住家の全焼) 13棟
3月10日	
3月18日	

## 【県内】鹿児島市街地の状況

昭和20年3月頃から本土への空襲は本格化しました。同年4月、米軍が沖縄本島に上陸すると、鹿児島は単なる補給地、背後地、内地ではなく、米軍の次なる上陸目標として、「激しい戦場」と化しました。

鹿児島市は、九州全域への空襲の通過地点に当たり、機影を見ない日は、ほとんどないという状況でした。

また、鹿児島には唯一の特攻基地があり、米軍の鹿児島に対する攻撃は他の地方都市と比較にならないほど、激しいものでした。



▲空襲によって焼け野原となった鹿児島市街地

3月19日	西之表全学校の一年間授業停止
3月25日	午後2時30分、グラマン戦闘機2機 西方より西之表市街地に来襲 小型爆弾3個投下、さらに機銃掃射して南方へ去る
3月26日	硫黄島で、日本軍全滅（硫黄島の戦い終結） 米軍が、沖縄の座間味島に上陸（沖縄戦の開始）
4月1日	米軍が、 <b>沖縄本島に上陸</b>
4月	<b>種子島の児童疎開開始</b> （小学2～6年全員） <b>西之表は大口・菱刈方面に疎開</b>
4月8日	西之表町義勇隊組織される 男子全員、女子は15歳以上25歳まで
4月15日	県立種子島中学校校舎を種子島駐屯部隊兵舎として使用
4月19日	B・24が2機、北方より西之表市街地に来襲 焼夷弾を多数投下、さらに銃撃を加えて南方に去る 種子島中学校全焼、軍人の死亡2人、負傷4人
4月20日	種子島中学校は、野首、小牧、納曾、東町の 各集落会宅を使って、分散授業を行う
4月24日	午後1時50分、B・24が1機 南方より西之表市街地に来襲 焼夷弾36個を投下、住家全焼34棟、全壊10棟

## 西之表市の状況

種子島島民が戦況の緊迫と戦場の接近を知ることになったのは、昭和20年2月に輸送船が種子島西方で撃沈され、兵隊の死体が続々と西之表海岸に漂着したことでした。

3月18日にはグラマン戦闘機が西之表へ初めての爆撃。その後も小規模の銃撃はほとんど連日のごとく行われ、終戦までに、全壊全焼260棟あまりという、西之表市街地は惨憺たる被害状況でした。

## 伊佐市（大口市・菱刈町）の状況

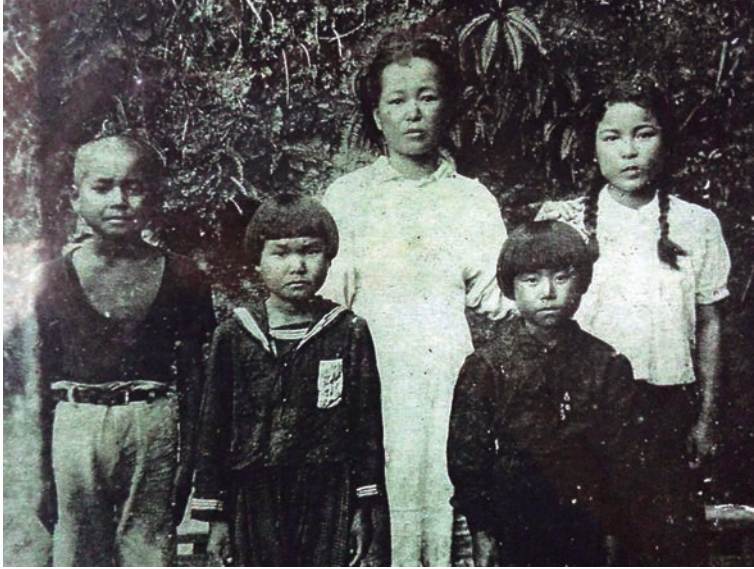
昭和20年3月18日、米軍機による南九州の大空襲がありました。この日未明、米軍機動部隊の艦載機延べ1500機あまりが、鹿屋・鹿児島・国分・出水・知覧など陸・海軍の基地に来襲。出水航空基地の攻撃に向かった米軍機は大口・菱刈上空を通過、羽月小学校に爆弾を投下し校舎の一部が破壊され、山野町では待機中の人馬が機銃掃射を受け馬が負傷しました。また、下手地区では燃料補助タンクが落ちて爆弾と誤認されました。

5月13日	午前10時25分、グラマン戦闘機8機、北方より来襲 浦田、伊関、安納、西之表市街地を銃爆撃して 東北方に去る、死傷4人
5月14日	午前10時20分より35分まで、グラマン戦闘機9機 南方より来襲し西之表市街地を銃撃す、死者1人 第二次世界大戦におけるヨーロッパ戦線が終結
5月15日	第二次世界大戦におけるヨーロッパ戦線が終結
6月	種子島独立混成10109部隊、12000人 古田の中割地区に駐屯、町民を動員して 同鍋割地区に陣地の構築はじまる
6月16日	午後0時50分、小型機8機、西方より来襲 現和小学校を銃撃、教員1人死亡
6月17日	<b>鹿児島市、最大被害の空襲</b> 死者2316人、負傷者3500人以上
6月21日	米軍が、 <b>沖縄を占領</b>
7月10日	午後0時20分より58分まで、小型機24機来襲 西之表市街地、現和、住吉を銃爆撃す 死亡2人、重傷2人
7月14日	午後2時、大型機8機、西之表市街地に来襲 中型爆弾24個を投下し、西南方に去る 住家60棟全半壊す

## 学童疎開

学童疎開は、空襲が激しくなった昭和19年夏に始まりました。米軍による本土爆撃に備え、大都市の小学校児童を安全な地方へ一時移住させたのです。まずは、親類を頼る「縁故疎開」、次に学校単位の「集団疎開」が行われ、約70万人の子どもたちが慣れない土地で不便な生活を強いられました。学童疎開には、空襲の惨禍から若い生命を守り将来の人的資源を確保（次世代兵士を温存）するという目的もありました。

県内での本格的な学童疎開は、沖縄戦が始まり、次の上陸が必至と考えられた種子島や甌島など、離島の学童疎開でした。種子島では、昭和20年4月に「学童集団疎開強化要綱」が出たこともあり、全島の小学2〜6



▲疎開当時の児童と保護婦（沖ヶ浜田：古田フサ子氏提供）

7月15日	午前9時40分、大型機10機 北方より西之表市街地に来襲 中型爆弾30個を投下し、南方に去る 住家全壊25棟、半壊60棟、警察署・郵便局も半壊
7月17日	ポツダム会議開始（8月2日） アメリカ・イギリス・ソ連らが参加
7月25日	午前11時15分、B・24、北方より西之表市街地に来襲 銃爆撃を加えて南方に去る
7月26日	ポツダム宣言発表 連合国は、日本に降伏を要求する
8月6日	<b>広島市に原子爆弾投下</b> （午前8時15分）
8月9日	<b>長崎市に原子爆弾投下</b> （午前11時2分）
8月10日	ポツダム宣言の受諾可否について、御前会議を開催 「国体の護持」を条件に、ポツダム宣言の受諾を決定
8月14日	<b>ポツダム宣言受諾</b> を、連合国側に通知 マッカーサーが、連合国軍最高司令官に就任
8月15日	正午、昭和天皇の肉声で読み上げられた終戦詔書が ラジオで放送される（玉音放送） 日本国民にとって「 <b>終戦の日</b> 」
9月	種子屋久航路、汽船の運航解禁
10月1日	<b>種子島の疎開学童、順次帰島</b>



年生を対象に、県北の穀倉地帯に学童疎開を開始しました。海岸線からも遠く艦砲射撃も届かないと思われたこの地域で、戦災と飢えから幼い子どもたちの命を守ろうとした親たちの悲痛な思いが伝わってきます。

西之表からは約2800名が、大口・菱刈方面へ集団疎開をしましたが、親元を離れての生活は不安が大きく、また米の生産地とはいっても当時は米の供出が厳しく、疎開児童も食糧難に直面しました。しかし、受入家庭の方々は子どもたちを温かく迎え入れ、家族同様に接してくれました。その後、疎開生活は半年近くにも及びました。

### 終戦を迎え

沖縄戦の敗北、さらには昭和20年8月の広島、長崎への原爆投下によって壊滅的な打撃を受けた日本はポツダム宣言を受け入れ、8月15日に無条件降伏。国民を苦しめ続けた長い戦争が終わりました。

終戦後、すぐには島に帰る船がなく、疎開児童の帰島が叶ったのは10月になってからでした。つらい戦争ではありませんでしたが、疎開生活では深い友情も生まれました。終戦後も受入家庭と疎開児童の交流は続き、さらに市町間の交流に発展、昭和37年には姉妹都市盟約の締結に至りました。

▼長崎市に投下された原子爆弾



ぼうくうずきん  
防空頭巾

太平洋戦争末期、空襲の際に落下物や火災の熱から頭部を守るために使用されたもの。木綿製なので防空壕内で崩落する土や石などを防ぐ程度にしかならず、主に避難する子どもや女性に着用された。  
(所蔵：種子島開発総合センター)



ちやわん  
茶碗

陸軍兵士が匍匐射撃で戦闘している様子や子どもが旭日旗を掲げ「ススメ、ススメ」と士気高揚している絵が付いている。  
(所蔵：種子島開発総合センター)



こくみんふく  
国民服

戦時中の男性服。当時、国民に贅沢をさせないように統一して作られたもの。実際には、国民服を新しく作れるのは、軍の関係者や学校の先生等に限られ、あまり出回っていなかった。  
(所蔵：菱刈郷土資料館)







てつぼう  
鉄帽

防弾性は無いが、砲弾の破片や落石、樹木など  
数多くの対象物から頭部を守るもの  
調理用のナベとして使用されることも多かった  
(所蔵：種子島開発総合センター)



ぐんぶく  
軍服

肩幅が40cmしかないので、小柄な軍人の  
ものと思われがちだが、当時の日本兵の  
平均身長は155～160cm、体重55kg程  
と言われている

(所蔵：種子島開発総合センター)



そうがんきょう  
双眼鏡

東部ニューギニアで戦死した  
陸軍中尉の遺品

(所蔵：種子島開発総合センター)



せんになぼり  
千人針

千人の女性から一枚の布に一針ずつ糸を縫い付けて結び目を作ってもらったもの  
 虎は「うちを出て、必ずうちに帰る」といういわれから、寅年の女性のみ自分の年齢だけ縫い付けることができた。また、「死線を越える」という意味で、布の中には五銭硬貨が縫い込まれている  
 家族は千人針をお守り代わりに兵士に持たせ、兵士は腹に巻きつけるなど肌身離さず着用し、戦火を戦い抜いた

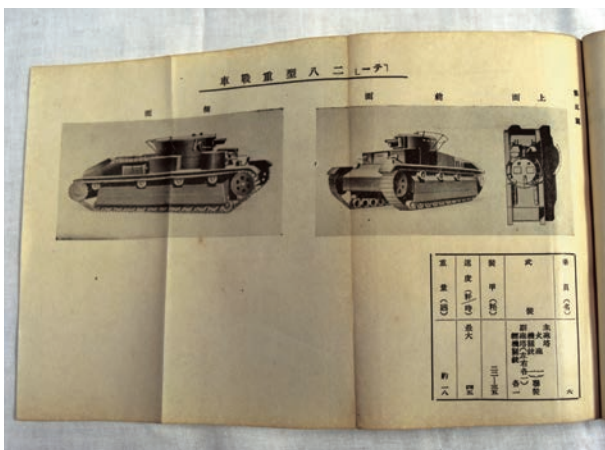
上（所蔵：種子島開発総合センター） 下（所蔵：菱刈郷土資料館）



教本等

敵国の制服図や戦車などの教本、必死に勉学に励んでいた様子が伝わるノートなど、数多くの書物が、戦後、種子島開発総合センターに寄贈されている

（所蔵：種子島開発総合センター）





## 疎開の思い出

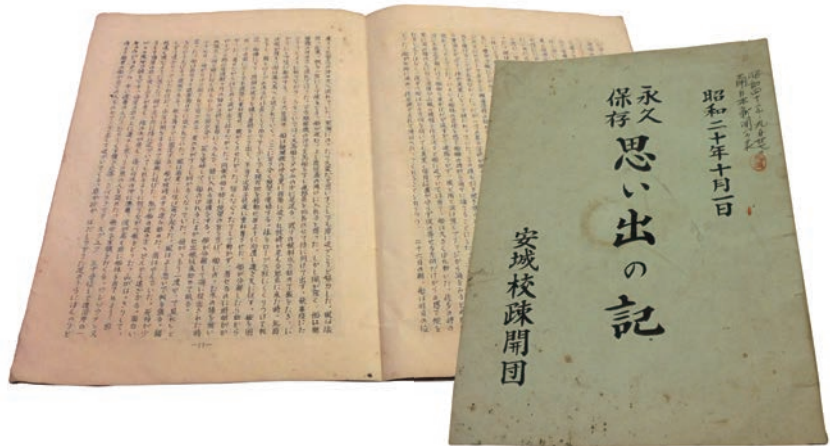
作 長野菅彦

- 一、ここは伊佐郡菱刈の郷土をはなれた幾千里学童疎開のそがために
- 二、乳の香もうせぬ幼な子がああ父母よ何如にぞと故郷をしのぶ夕まぐれ
- 三、餓と病にたたかいつ勝ちぬく為にと手を合せいとけなき日を年半ば
- 四、東亜の火ふた治りてかえるや筈の悦びにああ遭難のあわれさよ
- 五、かよわき腕も荒波もしのぎをけずる四昼夜天は救いぬ白沢に
- 六、辛き旅路の夢さめて共にかえりぬ我里に楽しく暮すきのう今日
- 七、世界平和の雲はれて正しく立たん我は今疎開の辛苦ぞたれか知る

(思い出の記より抜粋)

## 思い出の記 (安城校疎開団)

菱刈での疎開や帰島時の船遭難の思い出を疎開児童の引率責任者であった長野菅彦氏が昭和40年にまとめ発行したもの  
受入家庭の名簿も記されており大変貴重な資料である  
(所蔵：前之園ノブ子氏)



## 忘れられない数え歌

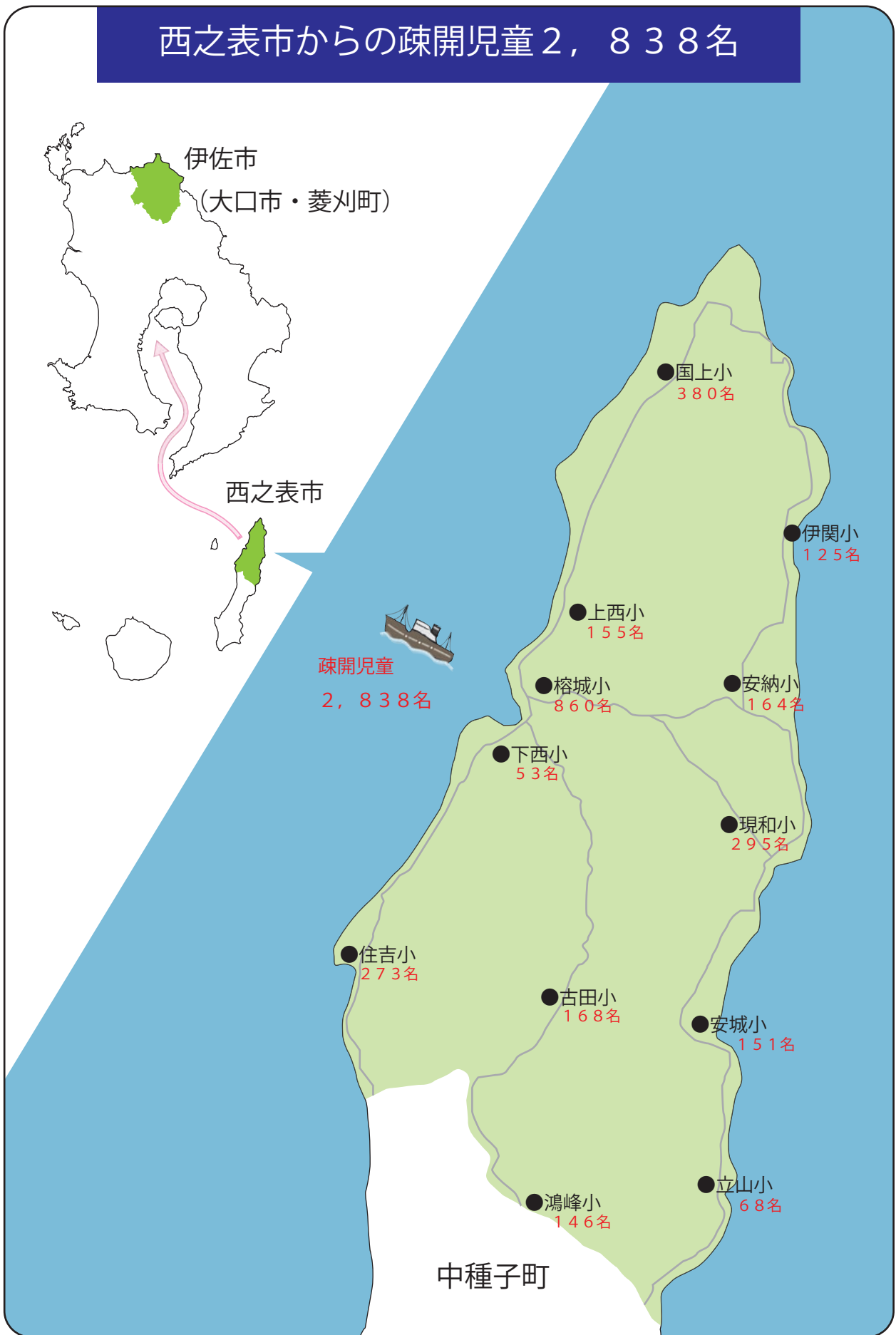
戦後70年の時が経った今でも、忘れられない記憶の一つに「数え歌」があると情報提供していただいたのは、現和校区の折口キクエさん。「当時、私は現和小学の6年生。疎開先から種子島へ帰ってきた後、何度も何度も友達と数え歌を歌っていました。今でも疎開の話をするとなつたことなど、この数え歌と共に忘れることはありません。」と教えていただきました。

それぞれの校区で、このような数え歌が作られ歌われていたことでしょう。複雑な心境が、子どもながらの素直な表現で歌われています。

- 一つとせ 人の知らない伊佐郡に、所はならがき羽月村
- 二つとせ 二親離れてきたからは、五か月たたなきや帰られぬ
- 三つとせ 皆さん私の腕を見て、哀れな疎開者見ておくれ
- 四つとせ 夜は九時半寝かされて、朝は五時半起こされる
- 五つとせ いつも班長さんが見て廻る、仕事をしなければ叱られる
- 六つとせ 向こうに見えるは種子島、早く帰りたいふるさとへ
- 七つとせ 何度も何度も見に行くは、哀れな疎開者と見ておくれ
- 八つとせ 山の中育ちの私でも、水稲のぞうしい(雑炊)食べられぬ
- 九つとせ ここで私が死んだなら、故郷の親は泣き暮らし
- 十つとせ どうとう五か月経ちました

皆さん、さようなら、ごきげんよう

# 西之表市からの疎開児童 2, 838名



# 伊佐市(大口市・菱刈町) の受入状況





西之表市伊関校区

古田 フサ子さん

(疎開当時：伊関小学校 3 年生)

### 伊佐への避難

私は当時、伊関に住んでおり、小学3年生でした。生活は貧しくご飯はからいものが主な食べ物でした。空襲も頻繁にあり、中学生に手を引かれ山の防空壕へ逃げ込んだことを覚えています。また、アメリカ軍の飛行機が捨てた油タ

ンクで同じ集落の方の家が全焼し、亡くなったりもしました。

そんな状況の中、疎開することが決まりました。私の母は自分の服を使って私のリュックや服を作ってくれました。親戚からは当時貴重だった「ゆで卵」をもらい、それがとてもおいしかったことを覚えています。伊佐へは「避難するため」と聞かされていましたが、親は「最後の別れになるかもしれない」と考えていたようで、泣きながら別れました。

鹿児島港へは、金十丸<sup>かねとまる</sup>で8時間程かかったと思います。定員を超えた人数が乗っていたようで重なるように乗り合わせ、とても窮屈<sup>きゆうくつ</sup>でした。やっと着いた鹿児島は、小学3年生の私にはとても都会に感じたことや桜島を見て富士山と勘違いしてしまったことを覚えています。

### 自分の子どもと同じように

伊佐に到着し、田中校区の方々にお世話になりました。初めは淋しくて泣いて過ごしました。受入家庭のおじさんは出征中<sup>しゅつせいちゆう</sup>で不在。おばさんがお世話をしてくれました。私のことを自分の子どもと同じように接してくれていたように思います。受入先には4歳の子どもがいてよくおんぶを



して子守りをしました。白ご飯に梅干しを乗せたお弁当を作ってもらい、とてもうれしかったことを思い出します。また、となりに小学1年生の女の子が住んでいて、よく一緒に遊びました。

受入家庭で、2か月くらいお世話になると公民館で集団生活をするようになりました。私は「スエウラ公民館」で過ごし、その期間は保護婦さんがお世話をしてくれました。集団生活では食べ物が少なく、ひもじい思いをしました。貯蔵してあったからいもを盗んで食べ、とても怒られました。しかし、牛の肉を地元の方からいただいて、雑煮にして食べたこともあり楽しい思い出もありました。

終戦後、帰島できることになり、お別れの日、田中小学校のみんなが見送りに来てくれました。多くの人が駅にいたことを覚えています。鹿児島では焼け野原に山形屋が1軒だけ残っている光景や船に乗れずに1週間ほど倉庫で過ごしたことを覚えています。

## 二度と戦争をしてはいけない

以上が、私の体験した疎開です。疎開先で一緒に遊んだ「のぶちゃん」（隣に住んでいた女の子）とは現在も地元の特産品を贈るなど交流が続いています。

私が体験を通して伝えたいことは、二度と戦争をしてはいけないということ。そして、いくつになっても、いつまでも、人と助け合いながら生きていくことの大切さを忘れないでほしいと思います。





西之表市上西校区（横山集落）

〔後列〕

山元勝実さん  
（上西小 3 年生）

長野 侃さん  
（3 年生）

馬場 梓さん  
（2 年生）

〔前列〕

日高 守さん  
（上西小 4 年生）

宮川理徳さん  
（2 年生）

園田時治さん  
（3 年生）

※疎開当時の学年

## 大波の中で

上西校区からは当時150人以上の子どもたちが疎開しました。疎開先へ移動したときのことは、よく覚えていますが。夜中に集合したものの、敵艦からの襲撃の恐れがあったため、なかなか船を出せずにいました。出航の機会を待

ち続けること4日、ようやく出発することができました。しかし、その日の天候は大荒れ。大波のなか、私たちは船底にギュウギュウ詰めに乗せられ、船酔いする子や「父ちゃん、母ちゃん」と泣き叫ぶ子がいたことを覚えています。やっとの思いで鹿児島市に到着し、今度は汽車（貨物車）で山野へ移動。そして、疎開生活が始まったのです。

## 受入家庭から受けた親切と平出水小学校での生活

受入家庭はそれぞれ異なりました。皆、最初ほとんど話をしなかったので、おそらくご家族を困らせていたと思います。地元との言葉の違いや、新たな土地で生活することへの不安、緊張を感じていたのかもしれませんが、それでも、お腹を空かせていた記憶はありません。いつも白いご飯を食べさせてくれたりと親切にしてくれました。食事はわらびやたけのこなど山で採れたものが主。たけのこはいろりで焼き、保存食にもなっていました。

学校は、平出水小学校に通っていましたが、勉強どころではありませんでした。教室は兵隊さんが使うため、授業は外で行っていました。休み時間には、ご褒美の金平糖欲しさに兵隊さんの靴磨きをする者も。現地の子どもたちもたくさんいて、一緒に田植えの手伝いや鮎釣りをして遊ん

だ記憶があります。こうして疎開先で生活している間は、友達と過ごす時間も多く、淋しく思うことはほとんどありませんでした。

### 仲間と共に乗り越えた

終戦後、私たちは1か所に集められ、帰島までのしばらくの期間、ほったて小屋のような場所で暮らすことになりました。トイレもなく、食糧もなく、受入家庭での暮らしとは異なり苦しい日々が続きました。

集団生活での世話役は5年生が中心で、下級生である4年生は、上級生の6年生からお弁当を取り上げられるなどのいじめにあうのは日常茶飯事。おから（大豆のかす）の配給も若干ありましたが、お腹が満たされることはなく、時にはバツタ（イナゴ）を焼いて食べることもありました。当時は、明日のことを考える余裕もなく、その日その日を生きることで精一杯。それでも、こうして仲間がいたからこそ耐えることができたのだと思います。

### ソテツの贈呈

帰島したのは、終戦の年の10月頃。まず大口から鹿児島市内へ移動しましたが、駅周辺が焼け野原になっていたの

で驚きました。その後は洲崎小学校（現在の城南小学校）に1泊し、<sup>かねとまる</sup>金十丸という船に乗って帰りました。

戦後しばらくして、上西校区では、疎開児童の受入に対する感謝の気持ちを込めて、平出水小学校へソテツを贈呈しています。しかし、当時贈ったものがオスのソテツのみであったため、昭和63年、平出水小学校PTAからの依頼に応え、横山集落からメスのソテツを再度贈呈しました。

他にも個人間で疎開先との交流を続けており、平成3年には、横山集落の疎開児童を受け入れたご家族を、種子島に招待したことがあります。その際、私たちは当時お世話になった方に各自宅へ泊まらせて頂きました。

戦後から70年。疎開経験後、長い時を経てきましたが、私たちは今でも、そしてこれから先も、当時受け入れてくださったご家族に対する感謝の気持ちを忘れることはありません。







西之表市安城校区

岩坪 トシ子さん (旧姓：榎元)

(疎開当時：安城小学校 3 年生)

### 旅行のような気持ちで

昭和20年に入ると、安城の上空にも敵機が飛び交い、空襲されるようになりました。そのため安城小学校でも、小学2年生以上の児童は疎開することになり、小学3年生の私も、菱刈に疎開しなければなりませんでした。

安城から港へ向かう途中も、敵機がやってくる度に、山陰に隠れたり、道に伏せたりしながら、やりすごしました。しかし、小さかった私たちは疎開の事情がわからず、船や汽車に乗れるのが楽しみで、旅行のような気持ちでいました。古田の平松あたりまで親などが送ってくれました。子どもたちとは違い、親たちは「これで生き別れになるかもしれない」という思いから、涙ながらの見送りでした。

### 学業より食糧調達が優先

無事に菱刈に着き、子どもたちは集落別に寺や公民館に集まりました。菱刈の宿所の方がくじを引き、当たった子をそのまま連れて行きました。しかし、兄弟が離れたがらなかつたり、小さい子が泣いたりしたため、兄弟同士は近くの家に置いてもらうなどの配慮がありました。

私たち疎開児童は、「菱刈の宿所を本当の家と思え」と言われていましたが、すぐに馴染めるはずもなく、着いた日の夜は泣き明かしました。宿所には同じ年の子どもがいましたが、急にやってきた私を受け入れることはなかなか難しかったようで、喧嘩をすることもありました。

2か月ほど個人宅で過ごし、その後は公民館での集団生活でした。食べる物が足りず、川内川の近くにセリやナズ

ナを採りに行くなど、学業より食糧調達を優先しました。保護婦さんたちは、野草とわずかな米で薄い雑炊を作るなど、少ない材料でも工夫しながら食べさせてくれました。

#### 4日3晩の遭難

終戦を迎え、やっと種子島に帰れることになりました。まず鹿児島市まで戻りましたが、街は丸焼けになっていました。なんとか種子島まで行ける船（昌丸）を見つけ、引き上げの兵隊さんたちと一緒に乗り込みました。船は順調に航海していましたが、馬毛島近くで突然エンジンが故障。もうすぐ種子島に着くという喜びも束の間、私たちは4日3晩漂流し、遭難してしまつたのです。

船の上では小さなおにぎりを食べたものの、それだけで足りるはずもなく、家族へのお土産だった素麺や乾パン、金平糖なども食べました。そのわずかな食べ物も、あつという間に底をつきました。水もなく、手に溜めた雨水をなめて、なんとかのどの渴きをしのぎました。船は浸水が進み、油交じりの水がどんどん上がってきました。私たちは胸のあたりまで水に浸かり、どうすることもできず、ただ、「お母さん、助けて」「お父さん、助けて」と叫んでいました。

4日目には、皆、船は沈むと覚悟を決めました。荷物の

中に残っていた乾いた衣類を集め、誰のものかは関係なく、分け合つて身に着けました。それから、甲板の上で5人ずつお腹のところを縄でつないでもらいました。もし海で死んでしまつても一緒に浜に打ち上げられるように、また遺体を見つけてもらいやすいようにという準備でした。

そんな時、船から山影が見えたのです。そこは枕崎市  
の白沢だったそうです。白沢の人たちは、小さな船を何艘も出して助けにきてくれました。

#### 生きているという実感

救助された時には立ち上がることもできない状態で、あと少し遅かったら命はなかったと思います。白沢の海岸で「赤痢が流行っているから水は飲むな」と言われました。

しかし、のどが渴いていた私は、砂浜を掘って顔を穴に突っ込むようにして水を飲みました。砂で濁つた水でしたが、とてもおいしかったです。その時やっと、本当に助かったんだと思いました。私はこの遭難体験で、水1滴の大切さを強く感じました。今を生きる皆さん、どうか物を大切に  
して暮らしてほしいと思います。

そして最後に、菱刈の人々、白沢の人々、命を救ってくれた人々に心からの感謝を込め「ありがとう」。



西之表市国上校区

落合 浩英さん

(疎開当時：国上小学校 5 年生)

### 国上小学校

当時の国上小学校には、380人の児童がいました。1年生の時に、名前書きや数を10まで数えることを教わり、3年生で掛け算や漢字を学びました。当時は、ひらがなよりもカタカナを先に学びました。放課後は、馬や牛の世話

が日課でした。遊びとしては、メダマ（ビー玉）、カルタ、オハジキ、竹馬、ダクマ（手長エビ）すくい、トンボ釣りなどをしていました。

### 疎開先の生活環境

国上の疎開先は、伊佐郡西太良村にしたらそんでした。最初の2か月は、個人宅の西福寺さいふくじにお世話になりましたが、その後4か月は消防ポンプ倉庫を改造した家屋で集団生活を送りました。4畳半2間に、児童約15人、保護婦1人、教師1人が生活をしていました。

食事は、麦飯、雑汁、ダゴ汁、いも、ふすま（麦の皮）、大豆かす、ユリの根、セリ、タケノコ、茄子、生梅などで、おかずは味噌汁、梅干、漬物だけで、弁当箱の半分くらいの量しかありませんでした。

入浴は週1回で、隣の家の風呂を借りるか屋外のドラム缶風呂でした。洗濯は各自で行うことになっていました。不衛生な環境で皮膚病が蔓延まんえんし、赤痢も発生して1人が亡くなりました。シラミ、ノミにかまれて痒くてしょうがありませんでした。



## 曾木小学校

最初の2か月は、曾木小学校の校舎で地元の子どもたちと合同で授業が行われていました。夏になると空襲が激しくなったため、すぐに山に隠れることができるよう、荒瀬<sup>あらせ</sup>神社の杉林など林間学校での授業を行いました。授業中、危険が迫ると避難用のタコツボに逃げ込みました。

曾木小学校の児童と合同で学んでいましたが、そこで気づいたのは、離島に住んでいるからといって自分の学力が劣っているわけではなかったことです。本土と比較しても勉強の遅れはなく、委員長にも選ばれ、しっかりと役目を果たすことができました。

## 人生を変えた恩師の言葉

曾木小学校で授業を行っていたのが、永山一先生でした。そこで先生に言われた言葉が、私の心に響きました。

「もう一度、鹿児島に出てこい。離島に住んでいるからということを引き目を感じることはない。世の中は広い。知性を磨き教養を広げ、視野を広く持てば、いくらでも羽ばたいていける。」

農家の子は農家を継ぐだけと思っていた私にとって、永山先生との出会いは、人生を変える大きな出来事でした。

## 疎開で学んだこと

私は初めて親元を離れ、故郷・家族・両親の大切さや有難さを知ることができました。さらに、厳しい環境での人間のあり方を学びました。本土に友人もできました。特に、永山先生と出会えたことは、本当に良かったです。

また、平和についての認識が高まりました。「戦争は絶対にしてはならない」と思います。今の子どもたちに言いたいことは、『命の大切さ』です。人は植物や動物など、他の生命をいただいて生きています。命は自分だけのものではありません。未来のために夢と希望を持ち、正しく、楽しく生きてほしいと思います。





西之表市榕城校区  
和田 シズさん (旧姓：尾崎)  
(疎開当時：榕城小学校 6 年生)

### 淋しいとか悲しいの感情もなく

疎開当時、私は桃園に住んでおり、榕城小学校の6年生でした。家族は、両親と子ども5人（姉1人、兄2人、4番目の私、妹1人）の7人家族でした。

いよいよ疎開するという時、私の気持ちの中に、淋しい

とか悲しいという感情はありませんでした。戦時中ということもあり、疎開も仕方がないものとして受け入れていたのかもしれませんが、一方で両親には、やはりこのまま二度と会うことが出来ないかもしれないという覚悟があったと思います。父から家紋入りの羽織をもらったことは、強い印象として残っています。

家族とは自宅で別れ、疎開児童の集合場所へ向かいました。出航できずに何日も自宅と集合場所を行き来し、5日目の夜に出航しました。船底でそれぞれ体育座り程度のスペースしかない状態で、たくさんの児童が窮屈きゆうくつな思いをして移動しました。鹿児島から大口までは、汽車で移動しました。もちろん客室などでなく、貨物車両で狭かったことを覚えていきます。

### 受入家庭から公民館での集団生活に

疎開先の大口では、初めの1週間は疎開受入家庭にお世話になりました。抽選で決まった私の受入先は、両親と子ども4人の6人家族でした。受入家庭の子どもたちと一緒にタケノコを採りに行ったりしました。

その後、各公民館で集団生活が始まり、私たちは郡山公民館で過ごしました。郡山公民館では、城、桃園、竹鶴、

今年川こんねんがわの約30人の子どもと一緒に生活しました。集団生活での食事は3人の保護婦が作り、材料は配給だったと思います。馬の飼料用として加工された大豆もご飯と一緒に炊いたりしていましたが、量は少なかつたと思います。風呂は、近所の方に借りて入っていました。交代で入っていたので、風呂に入れるのは1週間一度くらいだったと思います。また、毎朝、近くの川で顔を洗ったこと、その小川がとてもきれいだったことを覚えていません。

疎開先の牛尾小学校へは、集団で登下校していました。小学校では、空襲警報などで避難した記憶はありません。

### 少ない食事で、小さくなった胃

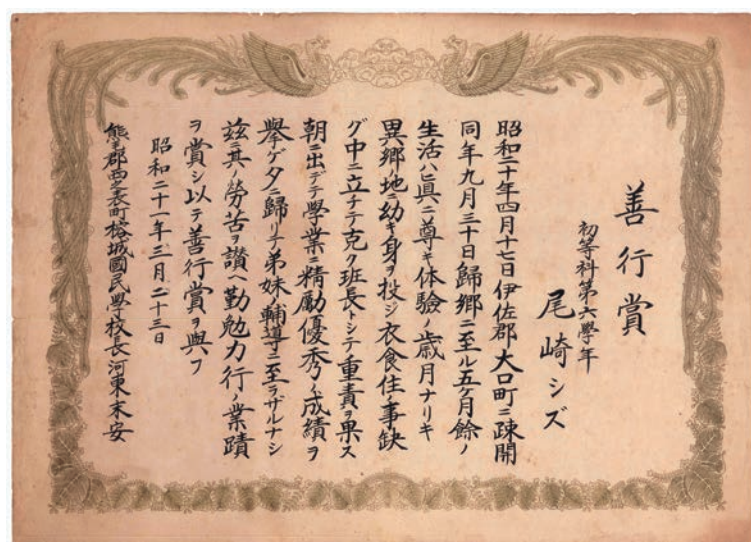
終戦後、種子島への帰島が決まり、鹿児島市内へと向かいました。帰島前日は洲崎小学校（現在の城南小学校）で休憩し、朝夕おにぎりを1個ずつ食べました。帰りの船はタネ丸という船で、あまり大きくなかつたので、行きと同じように、帰りもギュウギュウ詰めになって帰りました。

種子島に着くと、現在の種子島中学校あたりに集まりました。そこに両親が迎えに来ていました。また、先生から軍隊の食料である乾パンをもらったことを覚えています。

家に帰ると、両親が収穫した新米を出してくれました。

たくさん食べなさいと言ってくれるのですが、少ない食事で慣れた胃は小さくなつていて、あまり食べられませんでした。

6年生だった私は、疎開先で班長をしていました。後日、榕城小学校から『善行賞』（賞状）をいただき、私が疎開に行った証として現在も大切に持っています。







西之表市住吉校区

(左) 上妻 敏彦さん

(疎開当時:住吉小学校4年生)

(右) 羽島 宣夫さん

(疎開当時:住吉小学校2年生)

### 薬莢欲しさに駆け回る男児

皆が防空壕へ避難しているときに、敵機から機銃掃射される中を、落ちてくる薬莢欲しさに駆け回る男児が結構いました。薬莢は珍しい金属製品だったので、加工して遊び道具(指輪とか釣具など)にしていました。「撃たれたら

死ぬ」という意識がなく、戦争が怖いものという感覚はありませんでした。

疎開決定の知らせを受けて、嬉しさのあまり小学校の校庭を走り回りました。何しろ住吉という土地から出たことがない子どもばかりで、大きな船はもとより汽車に乗れるなんて夢のようでした。昭和20年4月29日、集団疎開出発。服装は、国民服とズボンで、靴はなく裸足でした。下着などもなくズボンは直ばきです。菱刈までは小舟、貨物船、貨物汽車で移動しました。菱刈に着いたときは種子島との気温の差を強く感じ、とても寒かったのを覚えています。

### とにかく腹が減っていた

菱刈の大きな公民館で1週間過ごした後、集落ごとに別々の地域へ分かれることになり、住吉中之町の子どもたちは小川添地区の公民館へ移動、そこで6か月あまり集団生活を行いました。本城小学校へ通って合同で授業を受けていました。本城小は大きな小学校で2階建ての建物を見たのは初めてで、学校の備品である野球道具、剣道道具も珍しくて仕方ありませんでした。

食に関しては、出された食事は少なく、お茶碗に極僅かな白米、うすい味噌汁(具は里芋の欠片ひとつ)くらいで

した。なので、とにかく腹が減って飢えていました。親の手伝いなどで畑仕事や田植えの経験のある上級生は、地元まかなの人の農作業に呼ばれ、そこで賄いを御馳走ごちそうになることができました。畑に関する知識があつたので、食べて良いものといけないものとの区別ができ、畑に入っては野菜などを盗んで食べていました。(時には、やりすぎて一晚柱に縄で縛られたことも…)

ある時は、バラカス(大豆油の搾りかす、牛のエサ)が1袋公民館に置いてあつたのを食べました。牛のエサとはいえ食えるものに変わりはありません。バラカスを頬張り、水をたつぷり飲むと、とりあえず腹はふくれました。牛のエサにまで手を出す子どもを哀れに思ったのか、公民館にバラカスの入った袋ごと置いてくれたのは農協の人の厚意だったのではないのでしょうか。

当時は、赤痢が流行っていましたが、薬はありませんでした。実際、赤痢で住吉小の児童が1人亡くなっています。疥癬かいせんにかかった時に、湯之尾温泉に連れて行ってもらえませんでした。痒さよりも温泉に行けたという喜びの方が勝つて、それだけは、楽しい思い出です。

※疥癬・・・ダニによる感染症

## たくましい4年生と素直な2年生

終戦となり帰島が決まりました。しかし、その道のりは険しいものでした。枕崎台風(昭和三大台風の1つ)の影響で川内川が氾濫はんらんし、菱刈駅は水没していました。ようやく汽車に乗ることができたのは帰島決定から4日後でした。鹿児島市街地は空襲で一面焼け野原となっており、汽車は目的地に着けず、途中の駅で止まりました。そこから延々鹿児島港を目指して歩きました。破壊された市街地では、水道の水が噴水のように噴き上がっていました。途中、焼け残っていた小学校に泊り、ようやく港へ到着すると、住吉浜之町のポンポン船が数艘迎えに来ていました。小さなポンポン船は、佐多岬の大きな波をかぶり、木の葉のように大きく揺れました。生きた心地はしませんでしたが無事、住吉の浜に到着しました。

羽島さんの姿を見た家族は「あばよー！こんなに痩せて、よく生きとったなーっ」と大変驚きました。「拾い食いをしてはいけない、勝手に取って食べてはいけない」という教えを真面目に守った羽島さんは、ガリガリに痩せていました。一方、それなりにたくましく過ごしていた上妻さんは、他の子に比べると日によく焼けて健康的に見えたため、厳格な祖母の疑いの目がありました。





西之表市中割校区

森園 ヤエ子さん (旧姓：中居)

(疎開当時：鴻峰小学校 6 年生)

### 疎開先への出発

当時、こうのみね鴻峰小学校からの疎開者は140〜150人ほどでした。疎開先への出発は、まず歩いて西之表まで行きました。親とは月読神社つきよみ(中割十六番)あたりで別れたと思います。友達も一緒だったので、悲しいという気持ちはな

く、泣いて別れた記憶もありません。

たくさん歩いてやっと着いた西之表の街を見た時は、焼けていてびっくりしたことを覚えています。船に乗り、汽車に乗り、たどり着いた疎開先は菱刈町湯之尾。川内川沿いの温泉地で、周りは山に囲まれた集落でした。

### 受入家庭での生活

湯之尾では、まず受入家庭に1〜2か月間お世話になりました。私を受け入れてくれた家庭は3人家族で、年の離れたお姉さんがいました。一緒に遊んだことは忘れてしまいました。今も名前を覚えています。受入家庭との思い出はほとんど覚えていませんが、白いご飯を食べさせてもらっていました。また、悲しい思いや怖い思いをすることもなく生活させてもらっていました。

### 集団生活

受入家庭での生活は疎開先に慣れるためであったのか、1〜2か月間で終わりました。その後は、2つの公民館に分かれて集団生活をしました。山間部であったためか、空襲などはありませんでした。普通に生活でき、ご飯も白米であったかどうかの記憶はありませんが、飢えない程度に

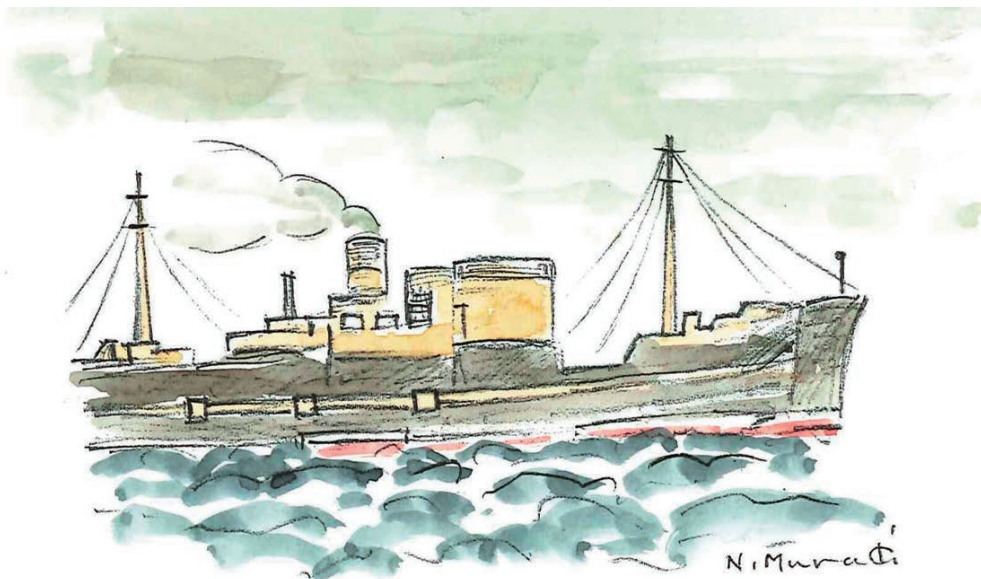
は食えることができていました。

また学校では教室に入りきらないため、外で授業を受けていました。学校が休みの日は、先生に呼ばれ近所の農家の手伝いをするようになりました。農家の手伝いではお茶菓子をもらうこともあり、とても楽しみでした。特に赤飯がとてもおいしかったことを今でも鮮明に覚えています。

### 戦争が終わっても

終戦後、種子島へ帰った時は浜津脇はまつばきの港で母親と再会しました。父は戦争へ行っていたため、父が帰ってくるまでの間、母が1人で生活を支えました。疎開よりもこの期間の生活の方が苦しかったかもしれません。

戦争は終わった後も、長い間たくさんの方が苦しみます。たとえばどんな理由があつたとしても決して起こしてはいけません。ずっと平和な世の中が続いてくれればと心から思います。





中種子町野間校区

田下 友枝さん (旧姓：杉原)

(疎開当時：住吉小学校 教師)

### 新任教師の疎開体験

疎開のあった1945年、私は19歳で教師になり、初任地の住吉小学校で、2年生の担任を任されました。児童数は、50人くらいだったでしょうか、全員の名前を覚える間もない4月29日、疎開先へ旅立ちました。

疎開先へ向かう船は金十丸かねとまるという大きな船で、夕方に出航しました。見送りに訪れたお母さんたちは、別れ際に「体に気をつけてね。」「言うことをちゃんと聞くんだよ。」と大きな声で励ましの言葉をかけていました。子どもたちが「母ちゃん、母ちゃん」と何度も泣き叫ぶ様子は、今でも忘れることができません。

翌朝、鹿児島港に到着し、駅から貨物車に乗りました。私は引率でしたが、疎開先を教えるもらっていませんでした。たぶん、知っていたのは教頭先生くらいだったのではないのでしょうか。着いた駅は菱刈駅でした。そこから徒歩で本城村へ向かったのですが、体はくたくたで、大人の私でさえとてもつらいものでした。子どもたちはもつときつかっただろうと、とてもかわいそうに思いました。

### 心を鬼にして

住吉の子どもたちは本城の各集落公民館へ分宿することになりました。私は、中之町集落の担当となり共同生活を送りました。公民館から学校までは1時間程歩かねばならず、遠かったことを覚えています。

集団生活で一番困ったことは、食糧不足でした。食事はお椀に子どもの拳こぶぐらいのご飯と具のほとんどない味噌

汁。お昼のお弁当も小さなおにぎり1個でした。私も子どもたちと同じものを同じ量食べて苦楽を共に過ごしました。そんな食糧事情でしたから、子どもたちは日に日に弱り、顔色も青白く、栄養失調で学校を休む子どももいました。また、道に落ちていた大豆を拾って食べたり、時には他人の畑の作物などを盗って食べる子どももいました。そのような時は、私は父親の役目もしなくてはなりませんでしたが、子どもたちのつらい気持ちも十分理解できましたが、他人から物を盗る行為は許されることはありません。心を鬼にして叱ることもありました。

弱った子どもたちの中には、赤痢や皮膚病になる者もいました。私たちは皮膚病の子どもたちを良く効くといわれる温泉に連れて行くなど必死に看病しましたが、住吉校区で1人が赤痢で亡くなってしまいました。

また、集団生活では、子どもたちの淋しい思いを和らげるため、毎晩、昔話を聞かせたり、歌を歌ったり、その日の反省をしたりする会を開きました。楽しい会の中でも、満月を見た女の子が「お月さまが鏡だったらなあ。私たちの顔を種子島のお父さんお母さんも見ているかもね。」とつぶやき、両親のことを思いだして淋しい思いをしていることが分かり、心が痛みました。

小学校では、住吉の子どもだけでなく伊佐の子どもも数人受け持ちました。空襲警報が鳴るたび、防空壕へ避難しなければならず、思うように授業ができませんでした。

### ポンポン船で住吉に

敗戦の知らせは防空壕の中で聞きました。戦争に負けたことは残念でしたが、種子島に帰れる喜びが大きく、帰島の指示があるまで眠れない日が続きました。帰島する際に鹿児島の様子に驚きました。市内が焼け野原になっていて水道の水が噴水のように噴き上がっていました。帰りはポンポン船だったため、大波を頭上にかぶり生きた心地がしませんでした。無事に住吉港へ着くことが出来ました。岸壁にはお父さん、お母さんなど家族の方々が迎えに来ていて、親子で抱き合い嬉しい涙の対面となりました。

疎開の経験はとてもつらいものでしたが、我慢すること、覚えたことと、様々な人と交流することができたことは、大きな財産となりました。70年経った現在も、疎開当時、私が担当した本城小学校の児童や住吉の子どもたちを担当していた先生と交流が続いています。子どもたちには、現在の平和で安全な生活を大切に、戦争だけは絶対にしてはいけないことを忘れないでほしいです。



70年の時を超え…

# 『再会』の旅が始まる

平和で豊かな「今」を生きる私たちが、

「これから」を生きる者たちのためにできることとは何でしょうか

この夏、西之表市と伊佐市では、終戦以来70年ぶりの再会を果たす2人を中心に疎開に関する取材を行いました。

疎開の記憶、変わらない絆、変わりゆく時代…。それぞれが思いを馳せた2日間。私たちはその様子をここに記し、問に対する答えを考えます。

今回の旅の様子を映像に残すため協力していただいたのは、種子島高校放送部の皆さん。

平成時代に生まれ、戦争を知らない若い世代である学生が中心となって取材を行いました。

■大木クリ子さん（旧姓：長野）

（西之表市在住）  
菱刈町への疎開を経験  
当時、安城小3年生

■堀内 敏子さん（旧姓：濱島）

（伊佐市在住）  
大木さんの受入家庭  
（故）濱島アサノさんの孫  
当時、菱刈小5年生

■梅下フサ子さん（旧姓：林）

（鹿児島市在住）  
大木さんの友人、同じく疎開を経験  
当時、安城小3年生



▲鹿児島港南埠頭で、種子島高校放送部のインタビューに答える大木さん(左)と梅下さん(中央)

## 再会の旅1日目

### ○再会へ向けて、出発のとき

9月21日早朝、種子島発の高速船に乗り込む大木クリ子さんは、不安と興奮が入り混じったような表情でした。あと数時間すれば、堀内敏子さん（疎開先である濱島アサノさんのお孫さんで、大木さんより2歳年上）と、終戦以来の再会ができるのです。

「当時、敏子ちゃんは小学5年生。ご両親は中国へ行っていたから、アサノおばあちゃんと2人暮らしをしていたの。終戦後、連絡を取り合うこともできず、お互いの印象は当時の記憶で止まったまま。また会える日が来るなんて……」

そんな大木さんの不安な気持ちを汲んで、一緒に伊佐市へ向かったのは、安城校区出身の同級生で、現在、鹿児島市在住の梅下フサ子さん。梅下さんも、菱刈町の別の家庭に疎開をしました。

梅下さんとは、鹿児島港南埠頭で合流。心強い大親友が加わり、種子島高校放送部のインタビューにも、自然と会話が弾みだします。

伊佐市職員が取材班に加わり、一路、伊佐市へ車で移動。車内や昼食会場で、再会に思いを馳せます。

(大木さん)

「アサノおばあちゃんの家の近くには、役場があったはず。どんな建物だったかよく覚えています。あとは、駅に豆を拾いに行った記憶もありますよ。学校も近くにあった気がします。」

(梅下さん)

「学校と言っても、勉強らしいことをした記憶があまりないです。空襲の時は、山の中に身をひそめていました。鹿児島市街地の方向に、爆弾が落ちたのを見たこともありましたよ。空が、真っ赤だったのを覚えています。」

当時を振り返っていると、あつという間に堀内さんとの約束の時間がやってきました。

「緊張するわ。70年ぶりに会うんだもの。私のこと、覚えてるかしら。」

大木さんの気持ちが高まるとともに、私たち取材班にも緊張が走ります。いよいよ、今回の旅のメインとなる『再会』の場所へと足を進めます。

## ○よみがえる記憶、あふれたす涙

大木さんの疎開先、濱島アサノさんの家までは、車を降りてから、ゆるやかな坂を登らなければなりません。日中の強い日差しが降り注ぐ中、70年前の記憶をたどるように一步一步、濱島家を目指し歩きだしました。

「懐かしいわあ、この景色。本当に、懐かしい。」

少し息を切らしながらも、その声は興奮気味に響き渡ります。少しずつ見えてくる濱島さんの家に、大木さんの表情も明るくなります。

坂を登りきり、視界に入ってきたのは、70年ぶりに見る堀内敏子さんの姿でした。背が高い大木さんとは対照的に、小柄な堀内さん。緊張した面持ちで、大木さんの到着を玄関先で待っていました。

「敏子ちゃん。本当に敏子ちゃんなの。」

大木さんの声に、堀内さんが大きく大きく、何度もうなずきながら2人は抱き合いました。まるで、止まっていた時計の針が一気に動き出したように70年という時が埋まります。再会の喜びにあふれ、会ってすぐに聞きたいと思っていたことは、言葉になりません。





▲再会の瞬間、涙を流し見つめあう堀内さん（左）と大木さん（右）

感動の余韻よゝんに包まれる中、堀内さんに促され、疎開生活を送った家の中で話を伺うことになりました。

懐かしみながら濱島家の玄関を上がると、大木さんの記憶が徐々によみがえります。全体の家の造りは、当時の面影が残っています。居間に案内され、最初に目に映ったのは、壁にかけられた濱島アサノさんの写真でした。涙を浮かべ声を詰まらせながら、すぐに駆け寄り写真の前で両手を合わせます。

「ありがとう、おばあちゃん。」

元気にここに来て、本当に良かった。」

小さく震える声で、語りかける大木さん。ずっと胸に抱いていた感謝の気持ちを伝えることができたという安堵感あんどかんと、もっと早く会いたかったという気持ちが周りにも伝わります。

「本当に良くしていただいたこと、覚えているわ。今でも感謝しています。」

落ち着きを取り戻した大木さんが、取材班に語りました。



## ○支え合いながら、共に生き抜いた時代

大木さんと梅下さんが、堀内さんを囲むように座り、当  
時を振り返ります。

(堀内さん)

「私はね、おばあちゃんから『種子島から子どもが来る  
から』って突然言われたの。何しに来るんだろう、食べ  
物も無いのに…って思ったけど、女の子が来ると知って  
すごく嬉しかった。」

当時、疎開児童の受入先を決めたのは、くじ引きでした。  
2人の出会いは、戦争、疎開という時代に振り回され、最  
終的にくじ引きという選択で導かれた運命だったのかわし  
れません。

堀内さんの大木さんに対する第一印象は、「2歳年下な  
のに背が高く、大きい子だな」だったそうです。

そう言われ、堀内さんの腕を握り、

「家族みたい、神様みたいって、そう思っていました。  
それくらい当時大事にされたんです。防空壕の中で2人  
で寝たこともありました。どこに行くのも一緒でした。」  
と語る大木さんは嬉しそうです。

▼濱島アサノさんの写真のもと、思い出を語る3人



しかし生活する中で、当然つらい思いをすることも、たくさんありました。

(梅下さん)

「食べるものもなく、本当に我慢強く生活しましたよ。とにかく毎日一生懸命に生きていました。」

(大木さん)

「難儀だったわ。井戸の水汲みとか、お風呂の用意とか、大変だった記憶があるの。時にわがままを言って、私はおばあちゃんを困らせたかもしれないね。」

親元を離れなければならぬ経験なんて、これから先の子どもたちに味わわせたくないです。」

(堀内さん)

「今の子どもたちは『疎開』という言葉を知らないかもしれないわね。あの時代を生きた者は強いですよ。」

3人は、真剣な眼差しで語りました。



▲濱島家の裏山を懐かしむ大木さん

受入家庭での生活は、そう長くは続かず、寺などでの集団生活へと変わりました。どのくらいの間、大木さんが濱島家にいたのか、お互いに覚えてはいないそうです。

(堀内さん)

「いつの間にか、いなかった。学校に行けば会えると思っていたけれど、空襲で出歩かなくなったから…。」

3人は当時、同じ菱刈小学校に通っていました。話の中で取材班を驚かせたのは、戦時中を感じさせる授業の様子です。

「紐ひもを練り合わせて、縛る作業を繰り返していました。『ルーズベルトとチャーチルを縛って絞め殺すんだ』とか言いながらね。」

「あとは、学校の校庭で、なぎなたの練習もしていましたよ。」

戦争一色の時代、小学生だった3人は、当たり前のこととして特に疑問を感じることはなかったそうです。



## ○空襲から身を隠す日々

### 菱刈小学校

次に私たちは、3人が通った菱刈小学校へ向かいました。濱島家から歩いて5分。3人はゆっくりとした足どりで、回りを見渡しながらか歩を進めます。

(梅下さん)

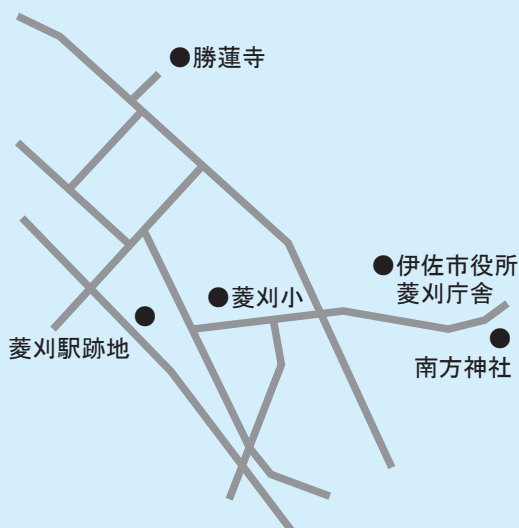
「疎開をしていた頃も、こうして歩いて学校へ行っていました。だけど、季節を感じている暇はなかったですよ。」

どんな気温だったのか、山々がどんなふうの色づいていたのか、周りの風景に目がいかないほど、『生きる』ことに精一杯であったことが、その言葉から伝わってきます。辿りついた小学校で、真つ先に3人は声をそろえて歓声をあげました。その視線の先にあったものは、正門近くにたえずむケヤキの木。

「懐かしいわ。この木があったこと、よく覚えています。」  
そう言って、3人は並んで見上げました。

戦時中から終戦後の平和な現在まで、子どもたちの様子を、ずっと見守り続けているケヤキの木。それぞれが思いを馳せるようにしばらく見つめていました。

▼菱刈小学校のケヤキの木を見上げる3人



## 南方神社

次第に戦況は厳しくなり、菱刈小学校での生活も束の間、学び舎は『山学校』（空襲から身を隠すため、竹やぶや神社など目立たない場所で授業を行っていた。）へと移るこ  
ととなりました。

大木さんが通った稲荷神社は山奥にあり、今回行くことはできませんでしたが、梅下さんの通った南方神社を訪れることができました。

鳥居をくぐると、神社までの参道を覆うように大木が生い茂り、まさに空襲から子どもたちを守る山の中の学校。神社は古びてはいるものの、当時は忘れまいとするようにひっそりと静かにたたずんでいました。



▲静寂につつまれる南方神社

## 菱刈駅跡地

南方神社を後にし、私たちが向かったのは、菱刈駅跡地。現在はスーパーマーケットになっており、目の前には広々とした水田が広がります。線路跡には道路が整備され、当時の姿をうかがい知ることはできません。ただ、道路脇に立派な記念碑が設けられており、この場所に確かに駅があったことを証明しています。

「ここにはね、山野線の線路が続いていて、私たちはよく貨物車から落ちた大豆を拾い集めていたのよ。」

お腹いっぱい食べる  
ことなどできなかつた  
当時、線路沿いに落ち  
る大豆でさえ貴重な食  
料であったのでしよう。  
大木さんはそう言っ  
て、様変わりした景色を見  
渡していました。



▲面影少ない菱刈駅跡地



## 勝蓮寺 しょうれんじ

『山学校』に通い出した頃、受入家庭での疎開生活ではなく、集団生活が始まっていました。梅下さんが集団生活を送った勝蓮寺を訪れました。みなみかた南方神社からは現在の道路で700mほどの距離。当時同い年である小学3年生の子どもたちと雑魚寝状態で寝泊まりをしていたそうです。

(梅下さん)

「中の雰囲気は当時のまま。

だけど、もっと広がったような気がするわ…。」

(住職)

「確かにもっと広がったですよ。再建をして少し狭くなりました。再建前の写真が壁にかけてありますよ。」

再建前の写真を見た梅下さんは、

「そうそう。このお寺よ。覚えがあるわ。」

と懐かしそうに眺めます。

現在の住職が、疎開当時の住職のお孫さんであることを知った梅下さんは驚き、疎開中とてもお世話になったのだと、何度もお礼を述べていました。

▼再建前の勝蓮寺の写真を眺める梅下さん



西之表から菱刈への疎開―。

小学3年生で親元を離れた2人は、受入先で心細い生活を送り、戦況悪化とともに、寺などでの集団生活、空襲から身を隠す『山学校』の日々を過ごしました。

生きて故郷に帰るといふ強い気持ちと、人に感謝する気持ちを持ち続け、必死に生きていたに違いありません。

再会の旅1日目は、この場所で終えました。

## 再会の旅2日目

### ○未来を担う子どもたちへ

#### 菱刈郷土資料館

9月22日、大木さん、梅下さんと一緒に、伊佐市立菱刈郷土資料館を見学しました。菱刈図書館の2階にあるこの資料館は、菱刈町の歴史をパネルで説明し、歴史的、民俗的資料が多数展示されています。

まず2人の目に入ったのは、入口付近に展示された、在りし日の菱刈駅の写真でした。戦後しばらくしてから撮影されたものでしたが、前日訪れた駅跡地に一切面影が無かっただけに、記憶をたどるには十分すぎる資料です。菱刈に着いた日、大豆を拾った日、菱刈を離れた日、様々な記憶がよみがえります。



▲菱刈駅

昔の生活・農具コーナーを順路どおりに巡り、資料館の中央にある戦争を伝えるコーナーで足を止める2人。手に取ったものは「千人針」でした。

「これを出兵する兵隊さんに渡していたのよ。沢山の人に、一針一針縫ってもらってね。」

「あと、歌を歌った記憶もあるわ。兵隊さんの見送りのときに、いつも見えなくなるまで歌っていたの。」

2人は、小さな声で忘れかけた歌詞を思いだしながら、声をそろえて歌い始めました。

「勝つてくるぞと、勇ましく〜」

その曲名は「露営ろえいの歌」。

資料館で歌詞を調べていただけ、改めて歌い始めた2人。戦争で命を落とした方々へ、哀悼の意を捧げるように、その歌声は力強くなっています。歌い終えたあと、2人の目には涙があふれていました。



▲千人針



## 曾木の滝

旅の締めくくりは、伊佐市の名所「曾木の滝」。堀内さんと合流し、戦時中にできなかつた観光を、3人で行いました。間近で見る曾木の滝は迫力があり、3人は、雄大で美しい景観に歓声をあげていました。広い公園を散策しながら、途切れるこ



▲ダム湖に沈む曾木第2発電所遺構

とのない会話。のんびりとした時間を過ごしました。そして、再会の旅、最後の場所となる公園内の昼食会場で、この2日間を振り返りました。

「これから先、私たちのような戦争経験者がいなくなってしまうたら、戦争や疎開の出来事が風化されてしまいうそで…。世の中どうなっていくのだろうと思います。だからこそ、語り継いでいってほしい。あの苦しい時代を二度と繰り返さないように、多くの人に、次の世代に。」3人の言葉の重みは、ずっしりと私たちに響きました。

そして、お別れの時。

「元気でね。今度は種子島に遊びにおいでね。」と涙ながらに言う大木さん。堀内さんはその言葉に大きくうなずき、強く手を握りました。3人はお互いが見えなくなるまで手を振り続け、再会の旅は、幕を閉じました。



▲別れの時、手を握りしめる2人

「再会でできて良かった。思い残すことはないわ。」70年を埋めるには短すぎる2日間。語り切れなかったこともあったでしょうが、別れの涙の中にも、心は晴れ晴れとした大木さんの気持ちが伝わります。

## ○終わりに

第二次世界大戦の終盤、沖縄本島がアメリカ軍に占領されたことで、海に囲まれ平坦な土地である種子島の危機感が高まりました。山々に囲まれ空襲から逃れやすい環境の



▲曾木の滝

伊佐市ですが、食糧難など厳しい生活状況はどこも同じ。しかし次代を担う子どもたちを守るため、西之表市から多くの疎開児童を受け入れました。その事実も、現在も両市の姉妹都市盟約の根底にあるのです。西之表市と伊佐市は、直線距離で約150km。海をへだて距離は離れていますが、互いを思いやり、心と心の距離が近ければ、その絆はいつまでも消えることはないと思います。

戦後70年。西之表市の疎開経験者、伊佐市の受入家庭の皆さん、総じて戦争を経験された方々の高齢化は、時代の流れとともに進んでいます。今を生きる私たちが、この絆を守り続け発展させていくことが、戦争のない平和な世界を実現することに結びつくのかもしれない。

『再会』——それは、終戦以来に会った2人の物語

ただ思い出を振り返る旅ではなく、「今」を生きる私たちが、「これから」を生きる者たちのためにできることを考えさせられた旅でもありました。

いつの日か、争い事のない平和な世界になることを願い、この物語を多くの方に語りかけます。





伊佐市大口牛尾校区  
内田 千代香さん  
(疎開当時:牛尾小学校6年生)

### 3人の女の子がやってきた

ある日、西之表市岳之田地区のてるちゃん・かずちゃん  
姉妹と従妹のさっちゃんの3人が疎開してきました。夕方  
になると淋しそうにしているの、「はったい粉を食べよ  
うや」と言つて、器に移して木の葉っぱですくつて笑いな

から食べたのをはつきり覚えていきます。

疎開当初しばらくは私の家で3人一緒に生活してしまし  
たが、近所のお宅からも「おいで」との声がかかり、かず  
ちゃんだけが私の家に残りました。しばらくすると集団生  
活が始まり公会堂で暮らしていましたが、熊本隊の兵隊さ  
んがそこで暮らすことになり、私の家の近くの田んぼに集  
落総出で家を造つて、そこでの集団生活に変わりました。

### ばあちゃんの漉き櫛す

近くだったのでみんなとよく一緒に遊んでいました。あ  
る時、かずちゃんが「千代香姉ちゃん、私しらみができて  
いる」と言うので、「ばあちゃんたちが使っている漉き櫛  
で漉いてごらん。しらみが出てくるから」と言つて、何人  
かを家に連れ帰つて、風呂に入れたり散髪をしてあげたり  
しました。これは後にかずちゃんから聞いたことですが、  
「集団生活になつてからは食べ物もなく栄養失調になつた  
り、お風呂も入れないし洗濯もできなくてつらかった」と  
言つていました。私の家で入れるお風呂が本当に嬉しかつ  
たようです。

戦時中も学校には行つていましたが勉強なんかしなかつ  
たです。学校でいつも「ルーズベルトの首をくくるんだ」

と縄を縛なったり、学林地に行つてカヤを刈つてきて炭俵を作つたりしていました。その縄も30mくらいだったかな、学校だけでは済まず宿題になつて家の人にも手伝つてもらつていました。

「そら来たぞ、また逃げろ」と空襲の退避ラッパが鳴るんです。防空壕に走り込むと、「ダダダダッ」と機銃掃射の音が聞こえたこともありましたが、からいも飴を煮ていたら、その煙をめぐけて爆撃があつて、その人は爆風で飛んできた畳が被さつて助かつたという話を聞いたこともありました。

父が昭和13年、祖父が昭和14年に亡くなつていたので、当時は36歳ぐらいの母と祖母で受け入れたんだな、結構強かつたなと思います。かずちゃんと話したことや遊んだことは昨日のことのように思いだされるけど、別れが「つらかつたとか、悲しかつた」という思い出はないです。いつ、どのようにして帰つていったかは記憶にないです。

### 終戦後も続く親戚付き合い

終戦後は手紙でやり取りをしていました。母は私の娘を連れ、5、6時間かけて船酔いしながら種子島に行つたことがあります。娘は当時のことを「魚釣りをしたり、種子

島の宇宙センターに連れて行つてもらつたり、夏休みの数日間とても良くしてもらつたから、親戚だとはばかり思つていた」と言っていました。疎開のことをわざわざ話すことはなかつたので、大人になつてから理解したのだろうと思います。母がかずちゃんたちに会つたのは、後にも先にもその1回でした。

私も40年くらい前に種子島に行きました。中種子に泊まつたのですが、わざわざ宿に訪ねてきてくれました。それからはずちゃんが種子島から鹿児島に引越すときに連絡をくれたり、平成23年に亡くなった私の夫の初盆にも来てくれました。今も行き来があり、ずっと親戚みたいな付き合いで、疎開児童の中には同級生もいましたがやっぱりかずちゃんが一番ですね。

私のひ孫も4年生になりますが、2年生の小さな子どもを知らない土地によく手放せたなど今考えても涙が出ます。本当に怖い時代でした。もう戦争は嫌ですね。



伊佐市大口山野校区

中村 貞幸さん

(疎開当時：山野小学校6年生)

### 受入家庭の多くは農家

春の頃でした。西之表の子どもたちが山野駅に来るとい  
うことで、役場から連絡があり集落の人が数人で迎えに行  
きました。私の家には、小学6年生と4年生の姉妹が疎開  
してきました。

私の住んでいる上松地区には、西之表の川迎地区の子ど  
もたちが来ていました。子どもたちを地区ごとに受け入れ  
たのは、顔見知りの子ども同士が近くに住むことで少しで  
も淋しくないようにという配慮があったようで、兄弟はで  
きるだけ離れ離れにならないように同じ家で受け入れ、ど  
うしてもできない場合は、隣近所になるように調整したと  
聞いています。また、当時は食糧難だったので、比較的食  
糧がある農家が主に受け入れをしていたそうです。

7月頃になると、保護婦さんや先生、集落の人たちが話  
し合いをし、集団生活が始まりました。必ずしもみんな同  
じような待遇ではなく家庭によって不公平があったため  
はないかと思えます。集団生活になると、食事は配給され  
るわずかな米しかなく、それまで受け入れていた家庭はお  
腹を空かせた子どもたちのために集会所に野菜を届けてい  
ました。きっと心配で、様子を伺っていたのではないかと  
思います。

### 初めて見た大きな黒砂糖

家では、ばあちゃんが夕方になると、からいもを焼いた  
り煮たりして私たちの学校の帰りを待っていてくれました  
た。私が食べようとすると「コラー」と怒られ、「みんな

を)呼んで来い!」と言われたので、姉妹や同じ集落の友達を呼び、みんなでからいもを分け合って食べていました。西之表の子どもたちは板チョコ状の大きな塊の黒砂糖を持ってきていました。お菓子など甘いものはなかったので、遊びの合間に初めて食べた黒砂糖は格別なものでした。

### 結婚祝いを一緒に選ぶ

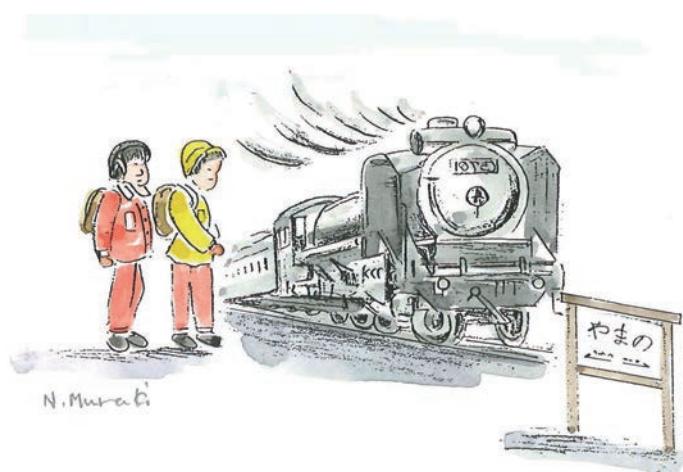
戦後5年ほど経って、川迎地区の子どもたちが山野まで遊びに来てくれました。これを機に再び交流が始まり、上松地区もみんなで西之表まで遊びに行きました。

そして、戦後10数年経った頃に、私の家に疎開していた姉の方が結婚の報告に自宅まで来てくれました。娘のようにかわいがっていた親父も、嫁入り前の幸せそうな顔を見てとても嬉しそうでした。親父が「結婚祝いは、何がよかけ?」と尋ねると、「お父さん、整理ダンス」というので、一緒に鹿児島市にダンスを見に行き嫁ぎ先へ送りました。その後も家族のような付き合いが続いています。

### 語り継ぐ

山野小で行われた下西小との交流会に参加して、今年で2回目になります。私は語り部<sup>かたべ</sup>として、疎開を受け入れた

時の話や西之表への思いを子どもたちに伝えるのですが、毎回ながら目頭が熱くなります。当時を振り返ると、本当に大変な時代でしたが、今よりも助け合って生きるという気持ちが強かったように思えます。私が体験談を話すことで、今の子どもたちにも自分さえ良ければいいと思わず、できることは奉仕する、困った人がいたら助けようとする気持ちを持つてほしいと思っています。







伊佐市大口平出水校区  
宝泉 保男さん  
(疎開当時：4歳)

## 大家族に新たな家族

当時4歳だった私は、9人きょうだいの末っ子で一番上の兄とは21歳離れていました。疎開してきたスナオさんは私より4つ年上で歳が近かったことから仲良く遊んだことを覚えています。

スナオさんは、疎開してきた初めは近所の家にお姉さんと2人で預けられていましたが、どの家も生活が苦しく数日後にはスナオさんをわが家で引き取ることになりました。

少しの米からいもを混ぜたり、カボチャの葉の茎を剥いて皮を煮て食べたりしていましたが大家族の腹を満たすことはできず、草木をかじって飢えをしのぐとすると口のまわりがかぶれたりして、生きるのがやっとの時代でした。

兄たちに連れられ近くに落ちた戦闘機を見に行くと、部品を盗まれないよう兵隊さんが寝ずに番をしていたことや、遊びで走り回る私たちに「あんまい、そど(騒動)すんな、飯をどっさい食うでえ」と親が言っていたことを思い出します。昭和20年5月頃やってきたスナオさん姉弟は、1か月程でわが家を出て集団生活に入ったため、その後の生活やいつ島へ帰ったかはわかりません。

## 友好の証

私が住む平出水地区には西之表の横山地区から疎開児童が来ていました。疎開から43年経った昭和63年に横山地区から友好の証として贈られてきたソテツは、校区内の平出

水小学校と止神<sup>とがめ</sup>神社に植えられました。植樹するため平出水を訪れた疎開経験者の中にスナオさんの姿がなく「わが家で過ごした時間はつらい記憶だったのだろうか」と不安でしたが、思いを確認することはできないまま年月が過ぎていきました。

友好の証として贈られた小学校のソテツは、大きく育ちすぎて校内にある通路にはみだしてきたことから、一部切り落とされてしまったことがありました。しばらくして横山地区の人が平出水小学校を訪れた際、切られたソテツをみてショックを受け、また新たに植樹してくれたことがありました。大変申し訳ないことをしてしまいました。また同じことがないように消えかけていた標柱の「学童疎開記念樹」という文字を書きなおし、大変な時代を共に過ごした人々の思いを子どもたちにも伝えていきます。

### 忘れかけていた記憶

3つ上の兄は中学校の教員になり赴任した西之表で義姉と出会い結婚、それまで忘れかけていたスナオさんを探しましたが会うことは叶わなかったそうです。

平成10年、畜産関係の役員をしていた60代の私は知覧で行われた会議に出席しました。そこで西之表の組合長の知

り合いで出席していたスナオさんと再会しました。組合長の紹介がなければ会うこともなく時が過ぎていたかもしれせん。戦時中幼かった私たちは、名前を覚えているだけで会っても顔はわからず、当時を振り返るような再会ではありませんでした。

### 思い出が重なった再会

5年程前、スナオさんが息子さんと一緒に私の家を訪ねてきました。初めは周辺の変化で思い出せなかったようですが、家の近くに来ると「こちら側が家の入口で、むこうに山があつて…」と少しずつ疎開当時の記憶がよみがえってきたようでした。これまで心につかえて気になっていたこと「ソテツを植樹するとき、どうして来られなかったのですか。わが家での生活はやはりつらい思い出ですか」と聞くと「いいえ、本当に良くしてもらいました。お姉さんたちは優しくかつたし、お兄さんたちにはよく遊んでもらいました」との答えにホッとしました。なんでも植樹に来たのは違う集落の人たちだったようで、もともと参加予定になかったそうです。短い滞在でしたが、両親の墓参りで昔を懐かしみ、気持ちを通わせた心地良い時間でした。



伊佐市大口羽月西校区

平木場 好美さん

(疎開当時：羽月西国民学校高等科1年生)

※現在の中学校1年生

### みんな覚えている

私の家には、ツヨシくんが来ていました。ツヨシくんは小学3年生か4年生ぐらいで、お姉さんも引率者としてこの地域に同行して来られていました。私の八代地域での疎開受入は各家庭に1人ずつでしたが、疎開の子どもたちは

同じ家だけでなく、各家庭を移動しながら地域全体で受け入れていましたので、カワカミさん、ハナキさん兄弟などほとんどの子どもたちを覚えていきます。

当時は大変な時代でしたが、麦飯、白米、からいもの入ったご飯など、家庭によって違ったものの、農村だったので食べ物に困ったという記憶はありません。疎開していた子どもたちが白いご飯を食べて喜んだという話を聞いたことがあります。私の家は麦が少し入ったくらいのご飯でした。ツヨシくんと寝食を共にしたのは、2か月くらいだったと思います。生きるのに必死な時代でしたが家族と同じ扱いだったと思います。頭にしろくもができた時にも、わが子のように母が手当てをしてくれていたことが思いだされます。

※しろくも・・・頭部白癬<sup>はくせき</sup>、頭部の水虫

### 忘れられないピーナツ味噌の味

ツヨシくんをはじめ種子島のみんなどは、ゴム銃やコマと一緒に遊びました。鳥のワナ掛けや魚釣りなどもしました。貰って食べた種子島のピーナツ味噌の味は今でも忘れられません。小学校では「ルーズベルトのくくり縄<sup>な</sup>」を繙<sup>な</sup>い、校庭は耕して燃料をとるために菜種や芋を植えたりし



ました。青年学校では校舎に「米英撃滅」と書いてありました。着るものとは言え、戦時中は人絹じんけんと書いて質のいいものではなく、戦時中から終戦後に栽培したラミーの茎から取れる繊維で洋服を作って着ていましたが、ゴワゴワして着心地は悪かったようです。

※ラミー・・・多年生の植物で、茎の皮から衣類の繊維がとれる

この地域には阿蘇部隊の兵隊さんが公会堂などに駐屯しており、将校クラスの兵隊さんが私の家に住むことになったので、ツヨシくんは引率してきたお姉さんが住む近くの家に移りました。私の家の将校さんには、部下の兵隊さんが食事などを運んでくれましたので、食事のお世話をすることはありませんでしたが、運んできた兵隊さんはお腹を空かせていたらしく、こっそりと母が食べ物を分け与えていたようでした。

### 届かない高射砲

この地域の上空は敵機の通り道で、見上げれば多くのB29爆撃機が編隊を組んで飛んでいたり、学校に行く途中に空襲警報が鳴り響き、グラマンからの機銃掃射の跡が道路に残っていたりもしました。出水市との境の山に高射砲を

据えてあって、敵機に向かって打っても届かず、線香花火みたいだったと記憶しています。

大変な時期に疎開をしてきた種子島の人たちもつらい体験をしたと思います。終戦になり、彼らが種子島に帰ってからは手紙などのやり取りもなく、会うこともありませんでした。生きていくのに精一杯の時代でしたが、家族で支え合うことで心は満たされていたようにも思えます。今は平和で幸せな世の中ですが、先の見えない、夢のない時代になったなあとつくづく思います。





伊佐市大口曾木校区

甲斐 眞智子さん

(疎開当時:大口高等女学校1年生)

## 2人の弟

当時女学校の1年生だった私が学校から帰ると、母が「激化する戦禍を避けるため種子島からの疎開児童を各戸で預かることになったから引き受けにいく」と言っていて出かけていきました。

連れられてきたのは落合くん兄弟で小学5年生と2年生だったと思います。私は8人きょうだいの末っ子で、しかも兄は1人だけ。女の子より男の子がいいなと思っていた私は、弟ができて大変喜んだことを覚えています。幼い2人は、母親を恋しがる年齢でしたが、当時の情勢を理解していたのでしょね、物資不足のうえ大家族で十分に腹を満たすことが困難な中、不平一つ言わず小さな体で畑仕事を手伝い、じっと我慢できる子たちでした。初めて家にやって来たときのリュック姿でちよこんと頭を下げた姿を思い出すと、私の孫の姿と重なり、何年経っても胸が熱くなります。短い時間でしたが、家族として生活したことは終生忘れることはありません。

## 優しかった母

厳格な父、口うるさい私たち姉妹に戸惑うこともあったかもしれませんが、私の母の優しさが2人にとって救いだったのかもしれない。母は少しでも淋しさを和らげてあげようと思っていたのか、農作業の手伝いにも率先して連れていきました。

当時は誰もが生活苦だったため、疎開児童の中には引き受け手がなく集落に用意された一軒家で集団生活する子も

いました。家にきていた兄弟が、収穫したからいもを集団生活する友人たちに持って行きたいとお願いしたときは、母が内緒で持たせていました。2人の淋しさを和らげていたのは、農作業を手伝う慌ただしい生活ではなく、優しい母の存在だったように思います。

### 立派に成長した弟たち

終戦になり両親のもとに帰った2人と時折電話で近況を報告する中で、兄は教員として、弟は司法書士として活躍していると聞いていました。故郷の味を懐かしく感じてほしくて、伊佐米や母が手づくりした梅干しなどを贈り交流を続けていました。

2人と顔を合わせたのは、終戦から37年経った母の葬儀のときでした。急な知らせにも関わらず、兄は種子島、弟は埼玉から鹿児島空港で落ち合い、50分かけタクシーで来てくれました。母の棺を見送り待たせていたタクシーで帰るまで、滞在したのはわずか数時間、母のために来てくれたことに感激し感謝しました。

### 母から受け継いだ絆

5年程前、司法書士をしている弟が鹿児島市であった同

窓会の合間をぬって、私の住む大口を訪問してくれました。わずから5時間弱の短い時間でしたが、私の母の慈愛に満ちた言葉や行動があなたのかい記憶として残っていると語ってくれました。帰り際バスに乗り込むとき、「姉さん元気で、必ずまた会いましょう」と手をぎゅっと握りしめてくれました。込み上げる涙をこらえることができませんでした。母から受け継いだ絆をいつまでも大切に、西之表との尊い友情を大事にしたいと思うことでした。







伊佐市菱刈本城校区

(左) 池ノ上 正行さん

(中) 下田 利夫さん

(右) 向井 七郎さん (旧姓：前原)

(疎開当時：本城小学校2年生)

### 誰が誰だか分からない

平成27年5月頃、鹿児島市に住んでいる恭子さん（本城出身）から「住吉小に本城小の子どもたちが行ったんだね」と電話が来ました。修学旅行で本城小の児童が、種子島に行った新聞記事を読んでのことでした。

恭子さんは今でも住吉の人たちと交流をしている同級生の1人です。本城小校区の場合は、個人の家への疎開はなく、ほとんどが公民館やお寺での集団生活だったので、一緒に勉強したり、遊んだ記憶もあまりなく、特定の人の付き合いもありませんでした。

昭和60年には、疎開当時2年だった同級生と引率者の田下友枝先生が「学童疎開40年前を偲ぶ菱刈・本城の旅」で菱刈を訪ねてこられて40年ぶりの再会を果たしましたが、当時8歳だったことやわずか半年の疎開生活だったことから、誰が誰だか名札がないとわかりませんでした。それでも、この訪問を契機に新たな交流が始まり、翌年に同級生13人を含む菱刈町の使節団が西之表市を訪問した折には、市長を始めとする市職員や同級生の大歓迎を受けたことを思い出します。

平成5年に田下先生を含む18人の疎開者が、当時生活していた小川添、岩坪、楠原などのお寺や公民館を巡る旅では、交流の一環として「菱刈夏まつり」に参加してもらったものの、大雨と大洪水に見舞われた思い出に残る交流になりました。その後も平成8年、平成14年と同窓会として続いています。

空襲警報ばかりでなかなか学校に行けず、皆さんとの接

点はあまりありませんでしたが、戦争で疎開をしてきているので、仲良くしないといけないと子ども心に思っていました。

## 生活の知恵として

当時の様子はといいますと、食べ物は何もない時代で、米粒は食べられず、粟、麦、からいも、カボチャのほか野いちご、桑の実などを取って食べており、種子島の人が持っていた黒砂糖をもらって食べた思い出があります。

柿も少し色がついたところに採って田んぼに突っ込んでおけば渋が抜けることや、割れていないうんべ（アケビ）を採ってきて隠していたのも生活の知恵だったのでしよう。柿を剥いてやっても食べない今の子どもたちには考えられないことで、世の中が贅沢になったなと思います。

履物はわらぞうりがあればいい方で裸足だと寒いときは足の感覚がなくなり、着るものは破れたらふせをして、また破れたらまたふせて、破れた部分がどんどん厚くなっていきました。

当時の遊びといえば、戦争ごっこやチャンバラごっこ、紙鉄砲、ビー玉、カルタ、缶蹴り、ギツチヨン、イッチョリンなどでした。川では青虫やイナゴをえさにして、ハヤ

を釣ったり、新田で泳げるようになるとう上級生が川内川に連れて行ってくれました。

## 次、会える日を楽しみに

当時を振り返れば、戦時中なので学童疎開は子どもを助けるためには仕方がなかったんじゃないかと思えますね。子どもだった私たちも今年でちょうど80歳になります。今、4月に住吉の皆さんと合同で傘寿（80歳）のお祝いをしようと計画しているところです。同級生たちが集まり、いろいろ話し合う時間も楽しいひと時です。これからも末永くお付き合いするためにも元気でいたいけないですね。





伊佐市菱刈湯之尾校区

尾崎 晴さん

(疎開当時：伊佐農林学校1年生)

### 父が逝去、兄が出征

昭和20年4月、私は伊佐農林学校の生徒でした。入学間もない4月23日に病で床に伏していた父が亡くなり、慌ただしく葬儀を済ませ、25日には兄の出征を見送り、9人だった家族は母と2人きりになりました。

それからしばらくして私が学校から帰ってくると、「兄ちゃん、お世話になります」と挨拶する男の子がいました。母の話では、「父も亡くなり兄も出征し、2人だけでは淋しいだろうから、1人ぐらい預かったほうがいいのでは…」と近所の人から話があったらしく、また「てんがらもんの子をやるから」とも言われたそうです。

※てんがらもん・・・「賢い」「頭が良い」といった意味

男の子は6年生の一郎くんというニコニコした非常に性格のいい子で、私が学校に行っている間、母と2人きりの時もおとなしなかったみたいです。一郎くんは軍属だったお父さんを南の島で亡くしたうえに疎開でお母さんと離れ離れになり、淋しいだろうなと思いつつ、末っ子の私にとつては3つ下の弟ができたような少しいい感じがして、湯之尾の共同浴場によく連れていきました。

※軍属・・・軍人以外で軍隊に所属する者のこと

### 大豆玉

当時の食糧事情は厳しかったと思います。牛馬に食べさせていた「大豆玉」という大豆の油を絞ったカスを丸めた硬いものの配給があり、集落の会長がなたで切り分けて



配っていました。私の家は父が病気だったこともあり少しだけ田んぼを作っていました。しかし、割り当ての供出制度があつて米を十分に食べることができなかつたため、みんな腹を空かせていました。食糧難の時代でお互いにきつく、ひもじさのあまりに盗みという悪さをしたという話も聞きました。1か月くらい経って湯之尾の公会堂での集団生活が始まると、一郎くんとは会うこともなく、いつ帰つたのかも知りませんでした。

### からいもで飛行機を飛ばす

戦時中は伊佐農林学校でも勉強どころではなく、晴れた日には間根ヶ平で木を切つて炭焼きをしたり、からいもを作つたりしていました。からいもの澱粉が醗酵してアルコールができ、それで飛行機を飛ばすんだと聞いていました。今では想像もつかないことです。よく動員があり、兵隊さんが寝るハンモックをかついで大口の神池まで持つていったり、十曾池で作業なども経験しました。

8月15日の終戦の日、母と2人で田の草取りから帰ると、玉音放送を聞いたすぐ上の兄が「兵隊に行けなくなつた」と嘆いていました。御国のために兵隊に行く準備をしていた兄にとって敗戦は残念でならなかつたようで、しばらく

はヤケ酒を飲んでいました。

私は学校で担任の先生から叩かれたことがあります。高等科2年生の時にみんなで海軍志願をすることになりましたが、「この戦況ではお前が1人ぐらい行つても行かなくても影響ないだろう」と志願に必要な親の承諾書に印鑑を押ししてもらえず、「非国民だ」といつて叩かれて残念な思いをしました。その反面、もし戦争に行つたら、病気の父を抱え母が大変だなども思っていましたので複雑な気持ちでした。

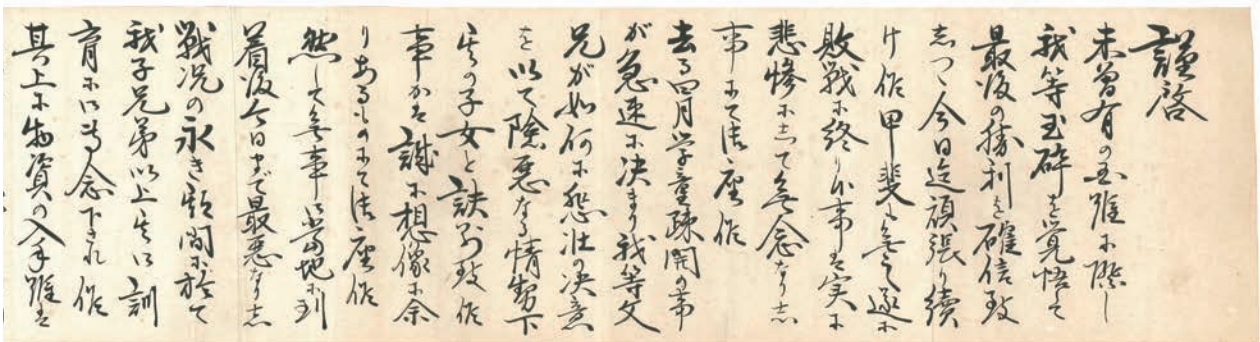
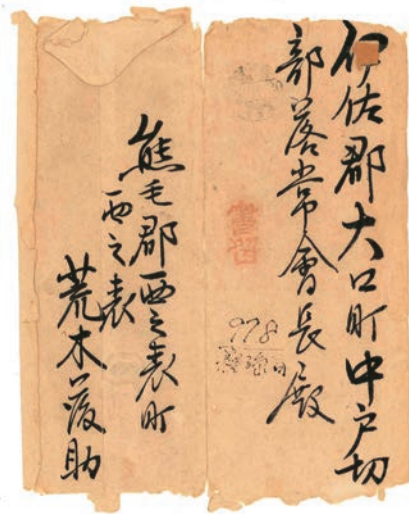
### 届いたトビウオ

戦後続いていたハガキのやり取りも途絶えた昭和33年頃、トビウオが箱詰めで送られてきました。思いだしてくれたんだなと涙が出ました。この時すでに母は亡くなつておりトビウオが届いたことは知りません。電話をしてみようかなと思うこともありましたが、次第に疎遠になり、今ではどうしているのかもわかりません。

# 疎開受入に対するお礼状

終戦直後の昭和20年10月、西之表町（現：西之表市）西町の自治会長を務めていた荒木藤助氏（故人）から、学童疎開を受け入れてくれた大口町（現：伊佐市）中戸切の自治会長あてにお礼の手紙が送られました。戦況悪化を受けて、物資入手も困難な中、子どもたちを温かく迎え入れ、家族同様に世話をしてくれたことへの感謝が綴られています。

終戦後、故郷に無事帰郷し家族との再会を果たした子どもたちの様子を伝え、疎開受入に対する感謝を「生涯忘れえぬ高思」と述べています。この手紙は、両市の姉妹都市盟約締結へと繋がる交流の始まりを記した貴重な資料として、現在も伊佐市役所に大切に保管されています。



謹啓

未曾有の玉砕に際し、我等玉砕を覚悟し、最後の勝利を信しながら、今日まで頑張り続けてきた甲斐もなく、遂に敗戦に終わったことは、実に悲惨であり無念でなりません。

去る四月、学童疎開の事が急速に決まり、我等父兄がいかに悲壮の決意をもつて、険悪なる情勢下、その子女と決別した事は、誠に想像に余りあるものでございます。

しかし、無事に御当地に到着後、今日まで最悪な戦況の永き期間において、我子兄弟以上に、御訓育に専念くだされました。その上に、物資の入手難にて益々苦しくなるにもかかわらず、よくこの重任を御担当され、そして何の事故も無かったことは、



益々若くは、我々も心相  
 好く、其の責任を担當  
 され、然して、何の事故も  
 生じ、かつ、是、實に、今、長  
 敵、我々、皆、部落、人、員  
 に、同様の、一致、協力、一  
 方、あり、ぬ、其、努力、に、配意、の  
 賜、あり、ま、す、私、共、の、到底、  
 及ばざる、や、ま、有、り、ま、す、  
 厚、礼、申、上、げ、ま、す、  
 去、る、九、月、二、十、六、日、の、故、  
 郷、に、出、発、し、ま、す、  
 鹿、兒、島、市、に、四、泊、を、し、  
 同、三、十、日、午、後、五、時、発、  
 動、船、種、子、丸、に、て、海、上、も、無、事、に、  
 約、六、か、月、振、り、に、あ、こ、が、れ、る、懐、か、  
 し、の、両、親、の、膝、下、に、歸、る、事、が、で、き、  
 ま、し、た、  
 その、日、は、海、岸、に、黒、山、  
 の、ご、と、く、待、ち、受、け、た、父、兄、た、ち、が、  
 一、同、皆、  
 その、無、事、を、見、て、  
 た、だ、  
 胸、一、杯、の、感、激、に、  
 し、ば、し、涙、の、溢、  
 れ、る、の、を、止、め、得、ぬ、次、第、で、し、た、  
 その、後、  
 一、同、無、事、嬉、々、と、し、て、  
 学、業、に、余、念、な、く、  
 朝、夕、に、当、地、の、  
 樽、を、  
 賑、々、と、し、て、い、ま、す、  
 何、  
 と、ぞ、  
 ご、安、心、下、さ、い、  
 胸、一、杯、の、感、激、を、暫、く、  
 止、め、得、ぬ、次、第、  
 の、溢、れ、を、止、め、得、ぬ、次、第、

これ実に会長殿始め貴部落会員  
 御一同様の、一致協力ひとかた  
 ならぬ御努力、御配意の賜物と  
 して、私共の到底及ばざるところ  
 であります。何とも御厚礼の  
 申し上げ様もありません。  
 去る九月二十六日、第二の故  
 郷の当地をお別れして、鹿兒島  
 市に四泊、同三十日午後五時発  
 動船種子丸にて、海上も無事に、  
 約六か月振りにあこがれる懐か  
 しの両親の膝下に歸る事ができ  
 ました。その日は、海岸に黒山  
 のごとく待ち受けた父兄たちが、  
 一同皆、その無事を見て、ただ  
 胸一杯の感激に、しばし涙の溢  
 れるのを止め得ぬ次第でした。  
 その後、一同無事嬉々として、  
 学業に余念なく、朝夕に当地の  
 樽を、賑々しくしています。何  
 とぞ、ご安心下さい。

去、る、九、月、二、十、六、日、の、故、  
 郷、に、出、発、し、ま、す、  
 鹿、兒、島、市、に、四、泊、を、し、  
 同、三、十、日、午、後、五、時、発、  
 動、船、種、子、丸、に、て、海、上、も、無、事、に、  
 約、六、か、月、振、り、に、あ、こ、が、れ、る、懐、か、  
 し、の、両、親、の、膝、下、に、歸、る、事、が、で、き、  
 ま、し、た、  
 その、日、は、海、岸、に、黒、山、  
 の、ご、と、く、待、ち、受、け、た、父、兄、た、ち、が、  
 一、同、皆、  
 その、無、事、を、見、て、  
 た、だ、  
 胸、一、杯、の、感、激、に、  
 し、ば、し、涙、の、溢、  
 れ、る、の、を、止、め、得、ぬ、次、第、で、し、た、  
 その、後、  
 一、同、無、事、嬉、々、と、し、て、  
 学、業、に、余、念、な、く、  
 朝、夕、に、当、地、の、  
 樽、を、  
 賑、々、と、し、て、い、ま、す、  
 何、  
 と、ぞ、  
 ご、安、心、下、さ、い、  
 胸、一、杯、の、感、激、を、暫、く、  
 止、め、得、ぬ、次、第、  
 の、溢、れ、を、止、め、得、ぬ、次、第、

早速御礼申し上げなければい  
 けない所、当部落は大半の住家  
 が戦災をこうむり、その整理等  
 に忙殺され、今まで延引、失礼  
 致しました。  
 私共一同は、生涯忘れ得ぬ今  
 回の高思に関して、いかにして  
 御報恩致すものは何かと、只々  
 苦心致していますが、とりあえ  
 ず、父兄一同に代わって、御厚  
 礼申し上げます。なお当部落学  
 童一同の無事を、お知らせ致し  
 ます。各位へそれぞれに御厚礼  
 状を申し上げるべき所ですが、  
 会長殿より何とぞよろしくお伝  
 え下さい。末筆ながら、御健在  
 をお祈り致します。  
 敬具

本文は、過去に解説されたものです。  
 (二次解説…原田純一・解説確認…寺師慶子)



# 姉妹都市盟約の締結

昭和37年11月9日

西之表市・菱刈町 調印

昭和37年11月10日

西之表市・大口市 調印



▲両市長の力強い万歳から喜びが伝わる

終戦後17年という時が経過し、疎開児童も20代後半の立派な社会人となった昭和37年。疎開を縁に続いてきた個々の交流が実を結び、まちぐるみの交流に発展しました。

西之表市での調印式では、大口市と菱刈町からの使節団を港に迎え、横断幕を掲げたパレードで市街地をねり歩き、盛大に歓迎。11月9日に菱刈町と、11月10日に大口市と、姉妹都市盟約を結びました。

## 姉妹都市盟約宣言

戦時西之表市学童が菱刈町に疎開するに当り菱刈町民は挙げて深き友愛の情を以て迎え入れ心からなる厚遇に西之表市民は感激措く能わざるものがありこれを機縁として相互の友情絶ゆることなく今日に至っている。この点に鑑み菱刈町並に西之表市は姉妹兄弟の心を以て相携え相回りその友情を益々深め福祉の増進を図ることを全願しここに姉妹都市の盟約を結ぶことを宣言する

昭和三十七年十一月九日  
 菱刈町長 植塚 忠  
 西之表市長 名越 不二郎

## 姉妹都市盟約宣言

戦時西之表市学童が大口市に疎開するに当り大口市民は挙げて深き友愛の情を以て迎え入れ心からなる厚遇に西之表市民は感激措く能わざるものがありこれを機縁として両市民間の友情絶ゆることなく今日に至っている。この点に鑑み両市は姉妹兄弟の心を以て相携え相回り両市民の友情を益々深め福祉の増進を図ることを全願しここに姉妹都市の盟約を結ぶことを宣言する

昭和三十七年十一月十日  
 大口市長 森 田 威 助  
 西之表市長 名越 不二郎

# 姉妹都市盟約の締結

平成21年5月16日

西之表市・伊佐市 調印



▲伊佐市誕生記念式典において、新たな宣言書に調印



平成の大合併により、平成20年11月1日、大口市と菱刈町が合併し、「伊佐市」が誕生しました。

平成21年5月16日には「伊佐市誕生記念式典」が伊佐市文化会館で開催され、市内外から約700人の来賓や関係者が出席し、伊佐市の誕生を盛大に祝いました。

その式典の中で、伊佐市と西之表市は、引き続き「姉妹都市盟約」を結ぶことを約束し、調印式を行いました。それぞれ宣言書に調印を行い、固い握手でこれまで以上の交流を誓いました。

伊佐市 故 鶴木 誠

平成20年11月1日、大口市と菱刈町は合併し伊佐市が誕生する。今後も「姉妹都市盟約」は続いていく。

「姉妹都市」の意味を後世に伝えなければならぬと感じ、当時の受入家庭の調査をした。

#### 【菱刈町内や北部九州菱刈会での聞き取り内容】

▽わが家へは男の兄弟2人が来た。5年生と2年生だった。弟は小さいため遠慮もなく行動していたが兄はすでに分別がつき、弟がはしゃぐと気を遣い、直ぐ離れに連れて行きたしなめていた。その姿が可哀想であった。

▽小さな男の子だった。受け入れた日、1人になって淋しくなったのか床下に入り出てこなくなった。どんなに説得しても出てこないため、近くの姉も一緒に住まわせることにした。

▽湯之尾の公会堂に30人くらい来ていた。疎開児童のある子どもの話では「家が焼けるのを後ろに見ながら逃げて疎開してきた。」と話していた。その頃私は女学校に通っていた。私は公会堂に醤油や味噌を差し入れたり、下米(小米)を持って行った。父が牛に煮て食べさせるために取っていたもので、それしかなかった。児童たちはからいもの苗床に残っていた床からいもを取って洗って食べていたから「床からいもは汚いから食べてはいけない。からいもつぼにあるから」と言っていて、それをゆでて公会堂に持って行った。

▽私の家には軍人も出入りしていた。大口に野戦病院が置かれ、湯之尾にはその分院があり傷病兵士がいた。赤痢が流行したのは、軍人である傷病者がもってきたのだ。

▽お寺(西本願寺)で1人死亡した。赤痢かどうかはわからない。後に、親の方がお骨を引き取りに来られたと聞いた。私の家は軍の将校が泊まる場所だったので疎開児童は来なかった。菱刈駅の近くに映画館があり、そこを軍隊が使っていた。



▽私の家には学童が大勢来ていた。その期間私は押入れに寝かされた。学童たちは兄弟姉妹が別れて生活するのを嫌がったため、多く受け入れたのではないかと思う。わが家は米を沢山作り、米もあつたのではないかと思う。米を入れる蔵もその時は空いていたので、そこも寝泊まりに使っていた。ご飯に粟やからいもを入れて炊いたが、いつも私たちは上の方の粟やからいもを食べさせられ、疎開児童をうらやましく思った事を覚えている。

▽疎開児童受入の日、わが家では「子どもたちを引き取るのだから子どもが行く」と言って小学生の私と女学校の姉が出迎えに行った。小組合長さんのお宅で引き渡しがあり、児童たちが表の間に縁側を向いて座り、集落の人が縁側に並んだ。まず、児童たちが番号札を引き、次に私たちが引き、番号のあつた児童を連れて行くことになった。中でも一際ひとときわ小さい男の子がいて「あの子は小学校に上がったとじゃろかい。」「あん子が当たらんな良かが。」と姉と話をしていたらその子に当たってしまった。家まで300メートル位あつたのであまりにも小さいその子を姉は「オンブするから」と言ってオンブし、私はその子の風呂敷包みを持って帰った。しばらくして、姉が「背中がムズムズする」

と言って母に見てもらったらシラミがいたので、その子の服を脱がせて調べてみたら、洋服の縫い目にシラミが並んでいた。その頃は、私たちの髪にもいたが髪に付くシラミは黒く、着物に付くシラミは白っぽくしていたのを思いだす。その人が今年の夏、62年ぶりに訪ねてきて昔話に花が咲いた。

「語り継ぐ、あの時を（学童疎開の記憶63年目の回想）」と題して、平成20年に故 鶴木 誠さんが受入家庭を取材された資料を、奥様のご了解を得て一部抜粋し、掲載しました。



伊佐市菱刈田中  
故 鶴木 誠さん

元伊佐市議会副議長  
平成 25 年 6 月 7 日逝去



伊佐市教育委員会  
教育長 森 和範

私の手元に「永久保存 『思い出の記』 安城校疎開団」（昭和40年11月発行）という資料があります。発行人は、疎開児童引率責任者の長野菅彦先生です。この記には、昭和20年4月20日、戦況厳しき中、安城の地を離れ菱刈に疎開していく小学生、引率の先生方の思いやその時の状況が切々と書かれています。加えて、菱刈の地でお世話になり、終戦を迎え鹿兒島から種子島に帰る途中、船の機関が故障し、4日3晩にわたり佐多岬沖、志布志沖、そして枕崎沖を漂流し救助され、九死に一生を得て、無事に種子島に帰ったことも記されています。

疎開は、単なる避難では無かったのです。切ない親子の別れ、命がけの渡航や汽車の旅、親元を離れた淋しさ、そして、受入先の伊佐の人々の優しさ、戦況厳しき中の

過度な空腹や病など、7歳から11歳までの幼い子どもには、あまりにも厳しい試練だったのです。

また、この資料には疎開児童、保護者そして引率者の氏名が掲載されています。その中には疎開した私の叔母や保護者としての祖父の名前もあります。私が安城で育つ頃世話になったすぐ近所のおじさん、おばさんの名前もあります。

「森君、おいと弟は、本城の岩坪に疎開したとやる。あっちんしいわざいか、世話あなつたとよ。」

「どまあ、菱刈に疎開したとよ。初めは、それぞれの家へ世話あなつたとよ。それから一時<sup>いつとき</sup>してから、寺で生活するごとなつたとよ。夕方あ淋しゅうして、『からす、なぜ鳴くの・・・』って歌うたとよ。」

2人とも、私の先輩の教員です。素晴らしい先生で、多くの人から慕われています。初めの方は、住吉出身で本城に疎開した方です。後の方は、古田出身で菱刈に疎開した方です。疎開先の伊佐の人々のお陰で無事に終戦を迎え、島に帰り立派な教員となって鹿兒島の教育を背負って来られたのです。

記録によると、この時、西之表から伊佐に疎開した児童は全部で2838名。西之表の全ての小学校12校からの児

童です。二度と繰り返してはならない戦争ですが、この非情で悲惨な戦争の中で、伊佐の人々の温かい心が種子島の子どもたちの命を守り、次代につないでくれた事実は、記憶から無くしてはならない、また後世に伝えていくべき大切なものです。平出水小学校には、上西小学校の人々から感謝の記念として贈られたソテツが、大きく育っています。大口市・菱刈町と西之表市が昭和37年11月に永久の友情を誓った姉妹都市盟約は、「人の愛と支え合い」を後世に伝える記念塔です。記念塔は、苔むすことが無いよう常に磨いていなくてはなりません。

戦後70年、世代は代わりつつありますが、この愛の精神、愛の繋がりを語り継ぎ、受け継いでいこうとする活動が様々なかたちで表れています。伊佐市の本城小学校と田中小学校が種子島へ修学旅行の行き先を変えた英断もその一つです。種子島を訪れた際に予想もしなかった大変な歓迎を受けたことは、子どもたちのこれからの生き方に少なからず影響を与えたことと思います。そのほかにもグリーンツーリズムの交流、行政間の交流など、小学生から大人までの活動が拡大しています。大きな希望です。

また、両市のどちらからか災害が起きるとすぐに互いに支援する体制ができており、水害や台風災害の度に支援が実

施されています。今、伊佐市では、東日本大震災で大災害を受けた南三陸町に市職員を派遣して、その復興支援に当たっています。これも伊佐市の持つ慈愛の表れと思います。人は1人では生きていくのが難しいと言われるが如く、まちは単独では発展しません。支え合いが必要です。伊佐市と西之表市はこれからも真の姉妹としての愛を忘れること無く繋がっていくことでしょう。

身近な親戚がお世話になった私が、今伊佐市の教育長の任に当たっていることに、偶然では無い何かの運命を感じています。伊佐の皆さんが西之表の子どもたちに注いで下さった深い愛情と受けた恩を、西之表を代表して少しでも返していくことが私の使命と感じています。また、学童疎開の中で示してくれた郷土の人々の他人に対する深い愛と広い心を、伊佐の子どもたちが学び受け継ぎ、誇りとしていつてくれることを願っています。

これからも伊佐市と西之表市、愛の心の架け橋が永遠に繋がっていくように今生きている私たちが努力していきましよう。



## 「DVD動画」制作

今回の記念誌発行では、種子島高校放送部の皆さんに、DVD動画の制作をお願いしました。

まず疎開体験者が伊佐市を訪問する「再会の旅」が企画され、その中で、「ここ数年、数々の賞を受賞している種子島高校放送部に映像を撮影してもらえないだろうか？」という提案。学校に協力依頼を行ったところ、年間スケジュールがびっしり埋まっている状況ではありませんでしたが、顧問の奥田純一先生と放送部員の皆さんのご理解をいただき、この動画制作はスタートしたのです。

### ○知らなかったことを「伝える」大切さ

種子島高校放送部 顧問 奥田純一

平成27年4月、西之表市役所から今回の番組制作についてのお話をいただいたとき、顧問として最初に考えたのは「生徒にどうやって疎開という話題に興味を持ってもらい、番組を作りたいというモチベーションを高めるか」ということでした。



戦争や疎開についての予備知識がほとんど無い生徒たちの番組作りは、戦争や疎開についての情報整理から始まりました。西之表市役所・伊佐市役所の助けを借りながら、時系列に沿って様々な資料を並べ、番組の骨格を作っていくきます。実際に取材を始める前に、まず生徒自身が「疎開とは何か」ということを理解しなければ、良い取材はできません。そのために必要な資料を、市役所の方々がお忙しいなかスピーディにお届けくださったことで、作業は非常にスムーズに進みました。

疎開経験者の方々への取材は、西之表市役所での予備取材とアメリカ鼻（西之表市安城地区）での取材、そして伊佐市での取材の計3回行われました。

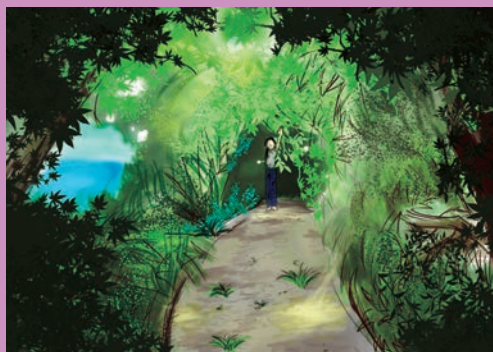
70年ぶりの『再会』を撮影するチャンスは1回だけ。その瞬間を逃さず、やり直しのできない撮影をうまく進めるため、何度も打合せを繰り返しました。緊張する生徒たちに、疎開経験者や市役所の方が幾度となく温かい言葉をかけてくださったことで、生徒たちは安心して取材に打ち込むことができました。

取材にあたってはMBC南日本放送・南日本新聞の方々にも同行いただき、夕方のニュースや紙面上で取組を紹介していただきました。それを見た地元の方々から情報提供があり、さらに取材に幅が出ました。また、終戦直後の写真は、古賀写真館様から提供していただきました。貴重な写真を挿入することで、番組に厚みが出ました。



### 番組制作にあたって留意した点など

▽「高校生が高校生に向けて作る番組」というコンセプトのもと、戦争についてあまり知識がない生徒にもわかりやすいように、そして興味を持ってもらえるように地図や写真、当時の状況を再現したイラストなどをふんだんに盛り込みました。なお、イラストは当時の状況を知る方々からの聞き取りをもとに、放送部兼美術部の生徒がパソコンとタブレットを使用して作成しました。



▽種子島高校では「番組は最初の1分間が勝負」であると考え、番組の冒頭にいかにインパクトを持たせるかに重点を置いています。今回は、70年ぶりの再会という感動の瞬間を冒頭に入れて、観る側の興味を引き付けながら戦争・疎開についての説明を入れていきました。また、今回の番組制作の目的は「歴史の教材の制作」ではなく「2人の絆を描くこと」にあると考え、あえて説明を簡略化したり、エピソードをカットした部分があります。



11月に行われた九州高校放送コンテスト県予選では最優秀賞を受賞、そこで審査員から得られたアドバイスをもとに、さらに改良を重ねて12月の九州大会本番に臨みました。審査結果発表の瞬間、優勝を手にした生徒たちの喜びの声を聞いて「頑張ってきた良かったなあ」と思うと同時に、これまでいただいた多くの皆様からのお力添えに、感謝の気持ちを新たにしました。



今回の番組制作は、放送部の力だけでは完成まで到底辿りつけないものでした。生徒たちにとって何よりも大きな力になったのは「多くの方々には番組制作を支えていただいている」という実感と、「疎開によって生まれた絆を、周りの高校生に伝えなければならぬ」という使命感でした。知らなかったことを「伝える」ために繰り返してきた努力が、

生徒たちをひと回り大きく成長させてくれました。

教員になって17年間、放送部の活動に携わってきましたが、ここ数年、戦争について取材し、番組を制作する学校が少なくなりました。戦後70年という時間の経過の中で、戦争を知る世代の方々にお話を伺えるチャンスは減る一方です。そんな状況の中で、今回の取材は生徒たちにとって、そして私にとっても貴重な経験となりました。



種子島高校放送部が誕生して丸5年、多くの皆様からのご支援をいただきながら制作環境を整え、さまざまな場所・人々を取材し、たくさんの全国大会・九州大会に出場して経験を積み重ねてきました。種子島高校放送部は、これからもこの種子島の魅力を島の内外に伝えていくために頑張ります。これからも応援よろしくお願いします。



## ○制作を終えて

種子島高校2年（放送部部長） 森永 愛音

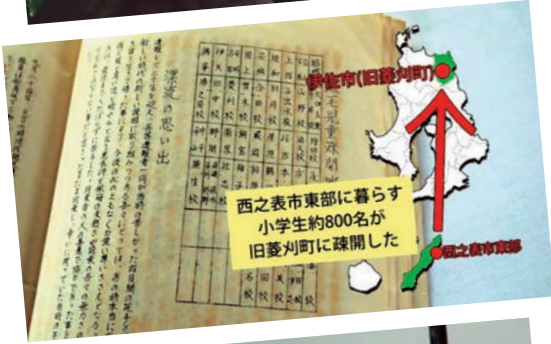
今回の番組制作にあたって、西之表市役所や伊佐市役所の皆さんをはじめ、たくさんの方々にご協力をいただきました。おかげさまで、平成27年12月に行われた九州高校放送コンテスト長崎大会では、テレビ番組部門で「優勝」というすばらしい賞をいただくことができました。

私たちのような若い世代は、学童疎開という話題にあま

り触れることがありません。今回の番組制作にあたって取材を進めていく中で、戦争を体験した方々に直接お話を伺ったり、大木さんと堀内さんの70年ぶりの再会という感動の瞬間に立ち会うことができたのは、自分たちにとっても貴重な経験となりました。

この番組を通して、たくさんの人々に学童疎開のことについて知ってもらい、戦争と平和について考えるきっかけになればと思っています。

## 再会



## 「シンボルマーク」作成

今回の記念誌発行にあわせ、姉妹都市の友好関係を象徴するシンボルマークを作成することになりました。

すでに種子島高校放送部がDVD動画の制作に取り組んでいたため、シンボルマークの作成は伊佐市の学生に参画してもらおうと計画。できるだけ多くの学生に関わってもら



らうため、中学生・高校生がクラス単位で取り組むことが可能な、大口明光学園中学校・高等学校にその考案を依頼することにしました。

平成27年9月、大口明光学園 重水校長と中原田美術担当教諭に内容説明したところ、10月の美術の授業の課題として取り組むことを快く承諾していただきました。

### ○発想力豊かな54点の作品

10月末、大口明光学園から54点の作品が提出されました。どの作品も、両市のことを良く理解した上で考案されており、両市の育んできた絆・これからの明るい未来が、よく表現されているものばかりでした。

伊佐市と西之表市では、その中から4作品を最終候補に選考。伊佐市在住のイラストレーター小門幸恵さんにデザイン化を依頼し、最終的に11月22日、両市長の選考によりシンボルマークを決定しました。

平成28年1月13日の表彰式では、最終選考に残った4作品の作成者にデザイン化された作品を、また、シンボルマークに採用された猪野未晴さんに、デザイン化された作品と表彰状を伊佐市の隈元市長から手渡しました。



採用された原案



▲隈元市長（最左）から表彰された猪野未晴さん（左から2番目）と最終候補者の皆さん



デザイン化された  
シンボルマーク

### ○シンボルマークに採用されて

大口明光学園高校1年 猪野未晴

今回、私の原案を伊佐市と西之表市の姉妹都市交流のシンボルマークに選んでいただき大変名誉なことだと嬉しく思っています。

私は、平和な時代に生まれ、また周囲に戦争を経験した人もいないため、戦争を身近に感じたことがありませんでした。しかし今回、戦時中に西之表市から伊佐市へ学童疎開していたことを知り、戦争を身近に感じました。

その戦争が終わり、70年が過ぎ、世の中が変わっていても、変わらず友好関係が続いていることは素敵なことだと思えます。このシンボルマークがこれからも続く、その友好関係の象徴になれば嬉しいです。



伊佐市立 本城小学校 が  
西之表市立 住吉小学校 を訪問



平成27年5月12日、本城小学校の6年生17名が修学旅行で種子島を訪れ、住吉小学校の児童と交流を深めました。交流では、合同給食のほか、70年前に教員として疎開を体験した田下友枝さんと、疎開児童であった羽島友治さんの2人から、当時の様子を教えていただきました。戦争という悲しい過去が、この場所でも起きていたこと、疎開が縁で伊佐市の方と交流が続いていることを強く感じる貴重な時間となりました。

## あつてはいけない

住吉小学校6年 濱添 蒼

種子島から伊佐市へ疎開した子どもたちは、たくさんいました。

戦争時代、鹿児島県の種子島には、敵から爆弾を落とされる可能性があったのです。大人はほとんど種子島に残り、子どもたちだけを小さな船に乗せ、朝も夜もこぎ続け、1か月くらいかけて伊佐市へついたそうです。伊佐市についた後は、子どもたちは両親のことを思い出して眠れなくなるので、大人たちは子どもたちが眠るまで、毎晩遊んでくれたそうです。

その時、小さな女の子が「お月さまが大きな鏡だったら良いのにね。そうだったら、お父さんとお母さんに会えるのにね。」と言って、泣き出したのです。

私も疎開していたらきっと泣いて、みんなも悲しんだと思います。なので、戦争はあつてはいけないことです。

## 子どもたちの感想

### 胸に残る話

住吉小学校5年 立石 朱霞

種子島と伊佐市で疎開をしていたことをこの交流で初めて知りました。そして、当時のご飯を見せていただいたときは「私はとっても幸せなんだなあ。」と強く感じました。また、私は当時の先生が話していた女の子が言った言葉を聞かせてもらってから何度も何度も女の子が言った「月が鏡だったらいいのに。」もしたら、お母さんやお父さんの顔が見れるのに。」という言葉が頭の中からはなれませんでした。そして、この事や他のことを聞いても全部胸にせまる話でした。やはり戦争は起こってはいけないと思います。なぜなら、人々を悲しませつらい思いをさせるからです。当時の先生や羽島さんの話を聞いて、私は泣きそうになりました。そして、当時の先生が泣きながら話しているのを見て「思いが詰まっている話だなあ。」と思いました。私はこの交流があつて良かったです。なぜかという疎開の話やその時のつらさを知れたからです。



西之表市立 下西小学校 が  
伊佐市立 山野小学校 を訪問



平成27年10月20日、下西小学校の6年生15名が、熊本への修学旅行の途中、山野小学校を訪問しました。山野小全員による花のアーチで出迎えられ、下西小の児童は照れた様子でしたが、事前にテレビ電話で顔が見える交流をしていたこともあり、すぐに打ち解けることができました。交流会には、伊佐市の公認キャラクター「イーサキング」も参加。フォークダンスや学校紹介のほか、学童疎開の体験を聞き、当時の生活の様子や平和の大切さについて学びました。この取組は、平成26年に引き続き2回目。



涙にこめた思い

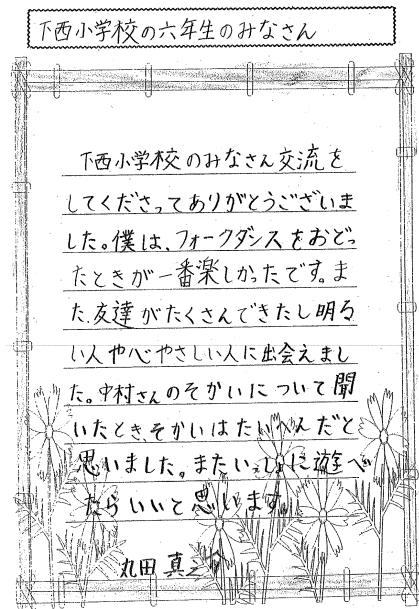
山野小学校6年 野元 美海

「初めましてー。」

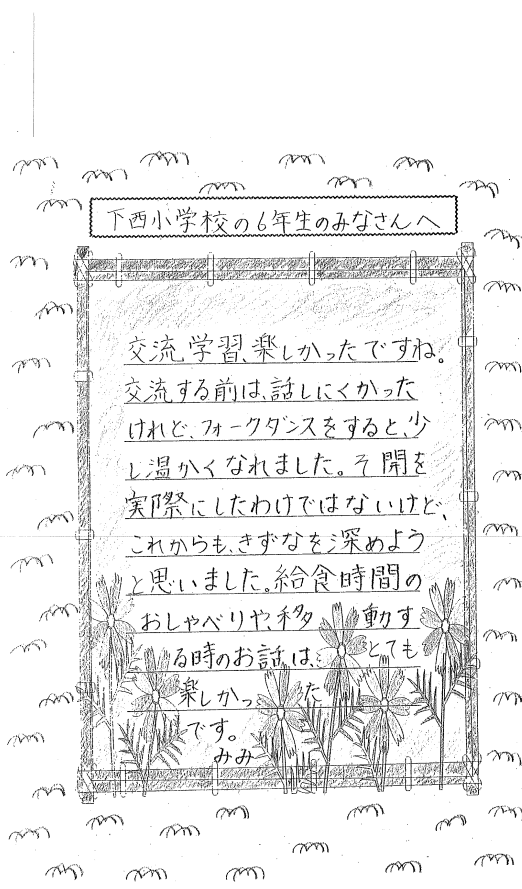
種子島から下西小学校の6年生が、山野小学校に来ました。西之表市と伊佐市は、姉妹都市として交流が続いています。昔、戦争があった時に、西之表市の子どもたちが疎開してきたことがきっかけだそうです。今日は、その交流で下西小の6年生といっしょにフォークダンスをおどったり、給食を食べたりしました。

その中で一番心に残っているのは、中村さんの疎開当時の話です。中村さんは話の途中で涙を流しました。当時のつらさを思い出したからです。食べ物を十分に食べることができず、普通の生活をすることができなかったそうです。中村さんがそんな生活の中で、楽しみにしていたことがありました。それは、毎日の学校帰りに食べる黒砂糖です。種子島の友だちが持ってきていた黒砂糖は何よりもおいしく、それがとてもとても楽しみで、下校を楽しみにしていました。黒砂糖の大きな一かけらを、大事に口の中で食べていたんだと思います。

子どもたちの感想



▲交流後、下西小に届けられた山野小児童からのお礼の手紙



そんな話を聞いてみると、あの涙には、つらい思い、悲しい思いだけでなく、楽しかったこと、いろんな思いがこめられていると思いました。この涙の思いを忘れずに、これからの交流を続けていきたいと思いました。

伊佐市立 田中小学校 が  
西之表市立 伊関小学校 を訪問



平成27年5月12日、田中小学校の6年生20名が修学旅行で種子島を訪れ、伊関小学校の児童と交流を深めました。交流では、伊関小学校の児童によるソーラン節の披露や両校の地域紹介クイズのほか、70年前に疎開を経験した古田フサ子さんから、当時の様子を伝える講話がありました。また、修学旅行の最終日には、「疎開の時に田中校区の受入家庭にお世話になったから」と、お土産を持って見送りに来られた疎開経験者の方もいて、感動的な一幕となりました。



## 交流を通して考えたこと

伊関小学校6年 福島 美咲

伊佐市立田中小との交流では、伊関小から自己紹介、伊関ソーラン節、クイズを出しました。田中小は、学校紹介、クイズを出してくれました。私は、伊佐市とは学童疎開でつながっていることを初めて知りました。いい交流だったと思います。また、交流の中で、学童疎開を体験した古田さんの話も聞きました。小学3年生の時、伊佐市田中に疎開し、親とはなれて生活していたそうです。ちゃんとした食事がとれないため、子どもたちの体が細くなっていったと話していました。古田フサ子さんが「二度と戦争をしない日本にしてほしい」と私たちに言われました。私もそう思います。たくさんの方が亡くなるより、みんなが仲良く楽しく過ごした方がいいと思うからです。フサ子さんは「助け合い」も大切だと話されました。助け合う心があれば、みんなが平和に暮らせるからです。

今の時代は本当に平和だと思います。それは、だれもが戦争をしたくないと思っっているからだと思います。戦争を体験した人の話を聞けるということはすごいことだと思います。私は、今以上に毎日を大切にしたいと思いました。

## 子どもたちの感想

### 田中小との交流で考えたこと

伊関小学校6年 古田 晃輔

姉妹都市である伊佐市の田中小と交流をしました。70年前、戦争をしていたころ、伊佐市に学童疎開したことがきっかけで姉妹都市になったそうです。自己紹介、クイズやゲーム、かえ歌などとても楽しい交流ができました。

そして、実際に学童疎開を体験された古田フサ子さんの話を聞きました。戦争で日本が負け続け、種子島にも空襲が起こるようになり、小学3年生だったフサ子さんも伊佐市に学童疎開しました。疎開した後も苦しい生活が続き、食料が不足しているので、毎日毎日おなかがすいていたそうです。今のぼくらには考えつかないことです。親から離れ、安全な場所に避難し、戦争が終わるまで離れている。一緒に疎開した子どもたちと生活しないといけません。

ぼくらは、とても平和な世界でくらしています。毎日おなかがすくこともない。親から離れて苦しい生活を送ることもない。だから、戦争をしない平和な世界に暮らしているぼくらにできることは、戦争や暴力をゆるさず、他人を大事にすることが大切だと思います。





西之表市教育委員会  
教育長 立石 望

姉妹都市である伊佐市と西之表市の児童たちによる交流の話が、本市教育委員会で持ち上がったのは平成25年の初秋でした。下西小学校の校長先生をはじめとする教職員、保護者の理解を得て、平成26年10月、下西小学校の6年生が、伊佐市の山野小学校（戦時中の下西小学校児童の疎開先）を修学旅行の際に訪問し、両校の交流が実現しました。

これを機に、平成27年には伊佐市の本城小学校、田中小学校の6年生が初めて修学旅行で種子島を訪れ、学童疎開で縁のある住吉小学校、伊関小学校の児童との交流を深めました。それぞれの小学校では学童疎開を経験した方々が当時の記憶をたどりながら、学童疎開の様子を語ってくださいました。

当時の学童たちがどんな気持ちで親元を離れて疎開をしなければならなかったのか、どんな生活だったのか、また疎開を受け入れてくれた人たちはどんな思いだったのか。70年の時を経て、当時の学童たちの孫（ひ孫）にあたる子どもたちが、当時の人たちの思いや気持ちを共有し、戦争の悲惨さや平和の大切さを一緒に考える機会になったことは大変意義深いものがあります。これからも、両市の児童生徒がさらに交流を深め、友情の輪を広げてくれることを願って止みません。

2泊3日の旅を終え、本城小学校、田中小学校の児童が種子島を離れるとき、たくさんの方がお見送りする中に、2人のご婦人の姿がありました。

「疎開した私たちを温かく受け入れてくれた菱刈町の子どもたちが、修学旅行で種子島を訪れていることを聞いたら、居ても立ってもいられなかった。当時一緒に遊んだ同級生の孫（ひ孫）たちにお会いしたくて、つの巻きや蓬たぐよまんじゅうのお土産を持って見送りにきました。」  
と涙声で話してくださいる2人の姿が、とても感動的で脳裏に焼き付いています。

# 戦後70年 戦争について学ぶ

戦後70年の記念の年。西之表市の小学校では疎開の話を中心に、戦争について学ぶ子どもたちの姿が見られました。疎開体験者が子どもたちに想いをつなぐ様子を紹介します。



**国上小学校**  
6月13日、創立135周年を記念する集会が開催され、国上小学校の卒業生で前西之表市長の落合浩英さん（西之表市国上）による疎開体験の講話がありました。  
当時の国上小の様子や疎開先での生活、服装、食べ物、遊びなどを写真や絵を使って紹介されました。  
児童らは、興味を持って聴き入り「戦争の悲惨さや当時の苦勞がよく分かった。これからも地域を愛し、よりよい国上小を創っていきたい。」などの感想を述べました。



**上西小学校**  
8月3日、太平洋戦争後70年平和集会が開催され、元上西小学校校長の吉原昭保さん（西之表市榕城）による特別講話がありました。  
児童らは、吉原さんが実際に体験した学童疎開など戦時中のつらく悲しい出来事に真剣に耳を傾け、平和の尊さについて学びました。吉原さんが語る平和へのメッセージは、「戦争という過ちを二度と繰り返さない、平和な世の中を未来につないでいく」という力強い意志とともに、児童らの心に届けられました。



**現和小学校**  
12月12日、二宮大陸さん（西之表市現和）による戦争に関する講話がありました。  
現和小学校の校庭でグラマン機から狙撃されなくなった木原平五郎先生の話や、ご自身の疎開体験談を話された二宮さんは、「平和な世の中でみんな仲良く元気に勉強してほしい」と締めくくりました。  
児童からは、「戦争の悲惨さを知り、平和を当たり前に思わず、毎日を大切に過ごしたい」と感想が述べられました。

## 市職員による交流

戦後70年を機に、両市の新規採用職員による合同研修をスタートしました。研修では姉妹都市のきっかけとなった疎開の話や現在の両市の取組などを学び、また互いの祭りにも参加し、より多くの理解を深めました。

伊佐市 伊佐PR課 相川 倫子

両市における2日間の研修を経て、西之表市が力を入れている事業やまちの魅力、姉妹都市交流についてなど興味深い多くのことを学ぶことができました。

交流では、知らない人や土地の魅力に触れ、各々の考え方を知ること、自分自身の視野や考えの幅が広がったと感じました。普段何気なく暮らしているまちにも、世代をこえて受け継がれた歴史や縁があり、それらを絶やさず繋いでいくことは自分にも市にとっても大きな財産になると感じました。

今回の交流で学んだこと、感じたことを今後の業務に活かし、精進していききたいと思います。また、姉妹都市としての交流を絶えず続けていききたいと思います。

伊佐市 健康長寿課 清藤 圭介

終戦から70年。戦時中の疎開をきっかけに始まった伊佐市と西之表市の交流は現在に至るまで続いています。この節目の年に、その交流のひとつに参加させていただいたことはとても素晴らしい体験となりました。

今回の交流事業で学ぶことは、たいへん多かったです。それぞれの庁舎で行われた研修会はもちろんですが、各地の視察や鉄砲まつりへの参加も、よい経験となりました。職員同士の交流は、見聞を深めるだけでなく良い刺激にもなりました。この経験をこれからの活動に活かし、交流をより深めていきたいと思えます。

伊佐市と西之表市の交流がこれからも引き継がれ、互いにとって良い刺激であり続けてほしいと思います。



▲鉄砲まつりで、武士やポルトガル人役を務めた伊佐市職員



西之表市 社会教育課 荒河翼

西之表市と伊佐市の交流事業として、私たち新規採用職員は、平成27年11月に伊佐市を訪問し、研修・行政視察を行いました。

私は、疎開をきっかけに両市が姉妹都市盟約を結んだことは知っていました。私の祖父も小学生のとき菱刈町へ疎開していたという話を聞いていたからです。しかし、掘り下げて深く聞いたことはなく、研修で伊佐市教育委員会の山下総務課長の話を聞くまでは、当時の様子について詳しく知りませんでした。

家族の生活だけでも苦しい時代に、西之表の子どもたちを迎え入れてくれた伊佐の方々温かさを決して忘れず、両市の絆をさらに深めていけるよう、私たち若い世代が今後より多くの交流の場を作っていかなければならないと感じました。

私は社会教育課に勤務して1年目になりますが、かつては両市の子ども会などの交流が今より盛んに行われていたと聞きました。この友情の灯を絶やさず、より大きなものにできるよう、市職員として様々な機会に携われることに喜びを感じ、これから頑張っていきたいと思えます。

西之表市 地域支援課 耕真奈美

今回の交流で初めて伊佐市が姉妹都市であること、きっかけが戦時中の疎開であることを知りました。

研修時に見た『再会』というドキュメンタリー番組（種子島高校放送部制作）では、疎開時代と一緒に過ごし、終戦後、会いたくても会えなかった2人の女性が、70年ぶりの再会を果たし、涙を流して喜ぶ姿がありました。私は、「2人のように、西之表市と伊佐市も離れていても、お互いを思いあうような関係でいたい」と思いました。

今回の交流をきっかけに、市職員だけでなく、市民の交流も深められたらと思います。私の課では、婚活イベントを担当していますので、西之表市の鉄砲まつりや伊佐市のもみじ祭りに参加するイベントを企画し、姉妹を超えて夫婦が誕生したら素敵かなと思います。



▲曾木の滝の迫力に圧倒される西之表市職員

戦後70年「縁と絆」記憶の風景と未来をたどる



## 西之表・喜界「学童疎開」

米軍の上陸必至とみられる離島から学童集団疎開がはじまった。昭和19年に喜界島の児童を菱刈で受け入れ、「学童集団疎開強化要綱」が策定された昭和20年には西之表の児童を大口・菱刈で受け入れた。受入れの話が急だったので、疎開児童が集団生活に馴れるまで、ひとまず各家庭で1、2名ずつ引き取り面倒をみていた。子ども

ものいない家はきょうだい共、また女兒あるいは男児をと申し込み、先々養子として育てる覚悟もあったという。初めての家、見知らぬ家族、ものも言わず、夕飯も食べずに泣き出す子どもも少なくなかった。『一日一日と過ごすうち、住みなれて友達もでき、通学するようになったが、なかには病弱な子どもを預かり、責任上、夜も休まず実親も及ばぬ看病をしてくれた家庭もあった。しかし夕暮れには必ず故郷を思い出しか、遠く南の空をながめながら歌うのであった。』からすなぜ鳴くのからすは山

にかわい  
い七つの子  
があるから  
よー子ども  
心に慰めつ  
つもやがて  
すべてを諦め  
るのであった。



この声を故郷の親が聞いたらいかに。ただ慰めの言葉もなく、勝つためにがんばれと手を取って握るのであった（抜粋要約…思い出の記「安城校疎開団」）

当時、大口国民学校では校庭に農園をつくってナスや唐芋などを栽培させた。また、米の生産地とはいえ供出も厳しく、農家も一日に2回は代用食といった生活で、疎開児童も食料難に直面した。農家の児童からサカズキ一杯の米と調味料をだしてもらい、何度も急場をしのいでいたという。  
（参考…郷土誌）  
次回、姉妹都市盟約について

平成 27 年 4 月 1 日発行

戦後70年「縁と絆」記憶の風景と未来をたどる

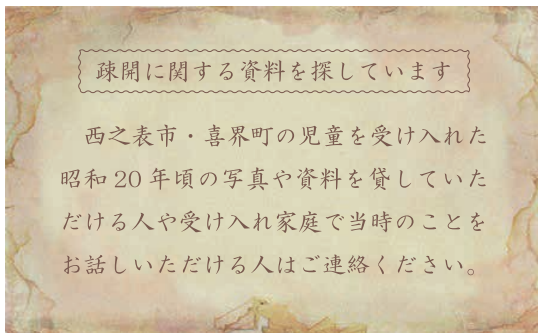


## 姉妹都市盟約

昭和20年8月終戦。疎開していた児童たちは島に帰る船がなく、苦しい生活は9月いっぱい続いた。菱刈小に疎開していた安城校の児童は、ようやく船長以下3人乗組の老朽機帆船で鹿児島市を出発。疎開児童200人余のほかは復員軍人の便乗者などが乗船していたところが、山川沖で浸水のため機関が故障して風に流され、大波にもまれて漂流。鹿屋進駐の米軍から飛行機も出動して捜索したが見つからず、一時は生存が絶望視されたが、9月27日に枕崎沿岸の白沢に漂着し全員救助された。

この学童疎開で辛苦をともにした西之表・喜界島の児童と大口・菱刈の児童たちは深い友情で結ばれ戦後文通をはじめたものもあった。また、これが縁となって結婚にまで進展した人もあり、個人的な交流が続いた。  
昭和37年になると、個々の交友からまちぐるみの交流に発展、西之表市と大口市・菱刈町がそれぞれ

れ「姉妹都市盟約」を交わし、昭和40年には家族ぐるみの集団疎開も受け入れていた喜界町と菱刈町が盟約を結んだ。  
伊佐市誕生後の平成21年5月に伊佐市として、西之表市・喜界町と姉妹都市盟約を締結した。  
（参考…郷土誌）  
次回、西之表市について



平成 27 年 5 月 1 日発行



戦後70年「縁と絆」記憶の風景と未来をたどる

姉妹都市「西之表」

種子島の北部に位置し、南北の長さ25・2km、東西の幅8・2km、面積は205・66km<sup>2</sup>で種子島の総面積の約45%を占める。(西之表市の面積は、伊佐市の約半分。)

種子島といえば、「鉄砲伝来の地」として教科書でもおなじみである。1543年9月、種子島の「門倉岬」に明国の船が漂着。その船に乗り合わせていたポルトガル人が手にしていた「火縄銃」を見て、14代目島主種子島時堯は2丁購入し、鍛冶師の八板金兵衛に複製を命じ「国産第一号の火縄銃」が完成した。

鉄砲以外にも「唐芋(サツマイモ)」は琉球から種子島に伝えられたといわれており、日本で始めて唐芋の栽培を行なったのが種子島である。意外と知られていないが種子島は米どころでもあり、日本一早い新米を出荷している。黒潮の影響を受け流入したさまざまな文化や物には、火縄銃や唐芋のほかに、ハサミ、イギリスの



①鉄砲祭り(8月23日)

火薬を詰め火ぶたを切る鉄砲隊の勇壮な姿は必見。



③種子鋏(たねばさみ)

切れ味抜群、左右対称の形で利き腕の区別なく使える。



②浦田海水浴場

入り江にできた白い砂浜はまぶしいほど美しい。

座礁船を救助した際に島民がお礼に贈られた「鶏(インギー鶏)」などがある。

また、近代に入ってから黒潮海流により大阪、京都の商人との交流が盛んで、島内で京言葉「・・・申す」などが使われていた時代もある。今でも客を迎えるとき「おじゃり申せ」というのはその名残であろう。(おじゃり申せ「いらっしやいませ」)

次回、学童疎開の体験談を掲載します。



戦後70年「縁と絆」記憶の風景と未来をたどる

「母から受け継いだ絆」

曾木 甲斐真智子さん 84歳

当時、女学校の1年だった私が学校から帰ると母が一言、「種子島から、学童疎開の子どもを各戸であずかることになったから」と出かけていきました。

連れられてきた兄弟は、小学5年と2年だったと思います。幼いふたりは、母親を恋しがる年齢でしたが、物資不足のうえ大家族で十分に腹を満たすことが困難な中、当時の情勢を理解し、小さな体で畑仕事の手伝いをしながらじっと我慢していました。

誰もが生活苦だったため、引受け手がなく集落に用意された一軒家で集団生活する子もいました。

厳格な父、口うるさい私たち姉妹に戸惑いながら、収穫した唐芋を集団生活する友人たちに持って行きたいとお願いした時、内緒で持たせてくれた優しい母の存在が寂しさを和らげていたように思えます。

終戦になり、両親のもとへ帰った後、兄は教員、弟は司法書士と

立派に成長しました。短い時間でしたが、家族として生活したことは終生忘れることはありません。お互いの近況を電話で話したりふるさと伊佐の品を贈ったりして交流を続けていました。

彼らと会ったのは、終戦から37年たった母の葬儀の時でした。急な知らせにも関わらず、兄は種子島、弟は埼玉から空港で待ち合わせ、タクシーで来てくれました。母の出棺を見送り待たせていたタクシーで帰るまで、滞在したのはわずかに数時間、母のために来られたことに感激し感謝しました。

幼いふたりの記憶には私の母の慈愛に満ちた言葉や行動があったかい記憶として残っていたのでしよう。

母から受け継いだ絆をいつまでも大切に、西之表との尊い友情を大事に後世に語り継いでいきたいものです。

次回、学童疎開体験談②を掲載。



戦後70年「縁と絆」記憶の風景と未来をたどる



「故郷想い 懸命に生きる」 中種子 田下友枝さん 88歳

昭和20年、19歳の私は初任地である住吉国民学校に赴任しました。2年の担任で50人ほどだったと思います。純粹で明るい子たちと過ごす中、戦争が激化、敵機が上空を飛ぶ日が多くなり、私は全員の名前も覚えきれないうち疎開の引率をすることになりました。

船で出発する時、別れのつらさで「母ちゃん、母ちゃん」と泣き叫ぶ子の声や姿を今でも忘れることはできません。

鹿児島港到着は夜明け頃、市内は空襲で焼け野原でした。駅から乗った列車は、牛馬を運んだあとで、悪臭の中を無言のまま菱刈駅に到着。そこから荷物を背負い、数km歩いて本城村に着きました。子どもたちは、各公民館に分かれ、私は「小川添」という公民館に泊まることになりました。

学校までの道のりは遠く、毎日1時間ほど歩いて通いました。学校では、疎開児童と本城児童が数班に分かれ、私も授業を受

け持ちましたが、空襲警報が頻繁に発令され、防空壕と学校の間で勉強どころではありませんでした。

それに、ひどい食糧難でみんな日に日に弱っていく、栄養失調で休む子どもも少なくありませんでした。空腹から道路に落ちていた大豆を拾って食べ、腹痛や下痢になった子を看病したり、皮膚病のカイセンにかかり、痒さで夜眠れない子を2時間かけ湯の尾温泉に連れて行ったり大変な苦労でした。

夜、縁側で月見をしていると、女兒が涙を浮かべ言いました。「先生、お月さまが鏡だったらいいのにね、種子島の父ちゃん母ちゃんの顔が映って淋しくないから」

終戦―疎開時、栄養失調と赤痢で教え子一人を亡くしました。今でも心から冥福を祈っています。

また、苦しい時代に精一杯もてなしてくださった本城地区の方々

に心から感謝いたします。次回、姉妹都市交流について。

平成27年8月1日発行

戦後70年「縁と絆」記憶の風景と未来をたどる



交流53年の軌跡①

「姉妹都市盟約」

昭和37年（1962）11月9日（菱刈町）・10日（大口市）

西之表から訪れた市長ら20人の使節を、花火と菱刈小学校鼓笛隊の演奏で出迎え、盟約式会場の中央公民館までの沿道には日の丸の小旗をもった大勢の人が集まった。

「友情の黒松」

昭和38年（1963）3月28日 学童疎開の縁は年とともに心のつながりを成長させた。これを形の上でも成長させるため、菱刈町から黒松の苗5千本を西之表市に贈呈。菱刈町長ら4人の使節も参加し記念植林が挙行された。

「夏休みに親善訪問」

昭和41年（1966）7月25日 菱刈町内の小中学生15人が、親善交歓団として夏休みを利用し初めて西之表市を訪れた。3泊4日の日程で地元児童らと交流、島の観光や史跡などを見学した。

「平出水のソテツ」

昭和63年（1988）9月15日

平出水に疎開していた西之表横山地区から、疎開43周年を記念し、平出水小学校とその校区内にある止神神社にソテツが植樹された。

「西之表集中豪雨災害」

平成13年（2001）9月2日 豪雨発生から一週間にわたり断水が続いていた。大口市から大量の飲料水を運び込み、大口市職員と商工会職員は西之表市職員と連携し、市内各地に飲料水の搬送を行った。西之表消防署には大口消防署職員が災害援助に向かい、消防活動に従事した。

発生からおよそ1か月後には、大口市から職員2人を2か月間、災害調査の応援として派遣した。

「盟約40周年記念式典」

平成14年（2002）11月10日 姉妹都市盟約後は相互に訪問し交流を深め、40周年にあたる年には大口・菱刈の代表者が西之表市を訪れ、記念式典が行われた。

次回、姉妹都市交流の軌跡②

平成27年9月1日発行



## 交流53年の軌跡②

### 「県北部豪雨災害」

平成18年（2006）7月

土砂災害や川内川の決壊などで甚大な被害を受けた。西之表市から職員4人と車両2台が派遣され、防疫作業などの支援をいただいた。

### 「伊佐市誕生姉妹都市盟約」

平成21年（2009）5月

大口市・菱刈町で結んでいた姉妹都市盟約を、伊佐市として改めて締結した。

### 「伊佐ツーリズム協議会研修視察」

平成26年（2014）8月

両市の修学旅行で民泊交流させて疎開の歴史を学び交流を深めたいと、伊佐市のツーリズム委員のうち18人が西之表市を訪問。現地視察や会員相互の交流と意見交換を行い、各受入れ家庭で民泊を体験した。

### 「災害時相互応援協定」

平成26年（2014）8月

いずれかの市で災害が発生した場合、物資・資機材の提供、職員等の派遣、被災者の受入れ、ボラ

ンティアの斡旋など、応急・復旧対策が円滑に遂行されるよう締結した。

### 「修学（教育）旅行費用助成」

平成27年（2015）4月

姉妹都市に教育旅行する者に対し、旅行補助金を交付することとした。これを利用し、本城小と田中小の6年生が初めて教育旅行で西之表市を訪問した（5月12～14日）。

### 「青少年の翼交流事業」

平成27年（2015）8月

両市の商工会青年部が主催で児童生徒が交流する「青少年の翼」が、22年目の今年、伊佐市で開催された。参加した小・中学生32人は、歴史を学んだり、ピザ作り体験をしたり、絆を深め合った。

### 「新規採用職員人事交流」

平成27年（2015）8月

今年度の伊佐市新規採用職員のうち9人が、西之表市で開催された鉄砲まつりに参加した。次回、今後の取組みについて



## 学童疎開に関する記念誌づくり

学童疎開が縁で姉妹都市盟約を結んでいる伊佐市と西之表市は、戦後70年の節目に「学童疎開に関する記念誌」を共同でつくります。記念誌には戦争の歴史や当時の様子がわかる写真、学童疎開経験者の体験談などを掲載します。作成のための取材で受入れ家族と疎開児童、それぞれの思いもわかってきました。家族との別れ、苦しかった食糧事情、さまざまな苦難を乗り越えられた縁と絆。悲惨な戦争

の記憶を伝えてくれる方々はみなさん高齢です。同じ不幸を繰り返さないために、貴重な声を記録として残す必要があります。

そして、平和の尊さを後世に語り継ぐには、若い人の存在も欠かせません。戦争について考える機会の多い今年、両市の高校生にも協力を要請しました。

今回は、喜界町との姉妹都市交流について

### 伊佐市

#### 大口明光学園

両市が想いをひとつに交流を続けていく象徴となるシンボルマークを作成。



### 西之表市

#### 種子島高校放送部

受入れ家族と疎開者の70年ぶりの再会に密着し動画を作成。



●西之表市の人口（平成27年10月1日）

16,207人（8,105世帯）

●西之表市の面積（平成26年10月1日）

205.66km<sup>2</sup>

●市章（昭和33年11月制定）



「西」の字の図案化であり、外側円形は海岸線を表し、鋭角に伸びるΛ形は市の飛躍的發展を意味している。

■種子島は、九州本土最南端の佐多岬から南東方向に約40キロメートル、鹿児島市から約115キロメートルの海上にあります。一般に山地・台地が多く、海拔は最高282.3メートルです。種子島の面積は、444.96平方キロメートルで日本の有人離島の中では5番目に大きな島となっています。（架橋により本土との往来が可能な島は除く。）

種子島の北部に位置する西之表市は、東西北の3面は海に面しており、面積は205.66平方キロメートル（東西8km、南北25km）で、種子島の総面積の約45パーセントを占めています。

■西之表市の年平均気温は19.5度で、すこぶる温暖です。5月から10月までは月平均気温が20度を超え、夏の期間が長いです。真夏の日差しは強いですが、常に快い海風が吹いていますので日中の暑さは九州本土と変わらないくらいです。一方冬の気温は10度から14度であり、日の最低でも0度を下回することはほとんどありません。

【市の花】

てっぽうゆり

その形状から名付けられたともいう鉄砲百合は、清楚な純白と高貴な香りが特徴で、種子島の歴史性を強く感じさせる花です。市内の原野に自生しており、栽培も容易で、庭園用としても広く鑑賞されています。



【市の蝶】

ツマベニチョウ

白色に、あざやかな紅色が印象的で、人家周辺でも一般的に見られる大型の蝶。飛び方も力強く、夏空の下、ぶっそうげなどの花から花へと颯爽と飛び交う姿は、南国情緒を感じさせます。



【市の花木】

ぶっそうげ

夏の種子島を代表する花木。その真紅に乱れ咲く姿は、青い海、青い空、白い雲、豊かな緑、すべてと相性バッチリ。繁殖も容易で、開花期間も長く、気候風土に適しています。



【市の木】

あこう

あこうは、市内に広く分布する雌雄異株の常緑高木。天に伸びる生命力は市の発展を、また気根から新しい樹幹となる活力は市民の強くたくましい姿を、幹と幹が練り合わされて大地に立つ姿は、市民の協調と連帯に例えられます。







### 鉄砲館(種子島開発総合センター)

南蛮船をイメージした外観。1543年種子島に伝わったポルトガル銃や国産第1号銃、さらに国内外の旧式銃約100丁が展示され、火縄銃の歴史や世界の鉄砲が見学できます。その他、種子島の文化や民俗を紹介したジオラマもみることができます。

**観光と特産品**  
 種子島は、歴史に大きな影響を与えた鉄砲伝来の島として知られています。また、日本唯一の実用衛星打ち上げ基地のある宇宙科学最先端の島でもあります。  
 近年では、有数のサーフィンスポットとして、若者たちも多く訪れています。  
 「歴史」「文化」「人」「自然」魅力あふれる種子島に足を運んでみませんか？



▲火縄銃兵衛とわかさ姫

迫力の火縄銃試射！

### 種子島鉄砲まつり

1543年の鉄砲伝来を記念して、毎年8月に行われる種子島最大のまつり。火縄銃の試射や鉄砲伝来に関わりの深い人物の扮装をした南蛮行列など、近代日本の夜明けを告げた壮大な歴史ドラマを再現します。



甘くてクリーミーなサツマイモ

### 安納いも

他のサツマイモと比べ、糖度が高く食感なめらか。種子島の安納地区で栽培されていたことから『安納いも』と名付けられました。全国的な知名度を誇り、種子島を代表する特産品のひとつです。



鍛冶屋が1本1本丹精込めて

### 種子鋏

種子島の鍛冶技術が生んだ伝統工芸品。一本の鋏を利き手の区別なく使うことができ、また、製造工程で刃にひねりを入れてかみ合わせを良くし、切れ味を増すなどの技法も取り入れられています。



日本の水浴場 88 選のひとつ！

### 浦田海水浴場

青い海、白い砂浜が美しい海水浴場。種子島の北側に位置し、周りを森林に囲まれた、静かな入り江になっています。とてもきれいで、家族で安心して楽しめる海水浴場です。



■伊佐市は、平成20年11月1日に大口市と菱刈町が合併し誕生しました。鹿児島県・熊本県・宮崎県の県境に位置する県本土最北の市です。3県を結ぶ国道267号・268号・447号の主要幹線道路が市内で交差し、これに県道、市道が放射状に走る道路網を形成しています。また周囲を国見山地などの山々に囲まれた盆地を形成しており、平地の中央部を川内川が流れ、これらの水系を中心とした広大な水田が広がっています。面積は392.56平方キロメートル（東西23km、南北27km）で、県内の市平均値の約1.3倍となっています。地目別面積は、市有林・県有林・国有林などが約50%を占め、山林30%、田畑15%となっています。

■伊佐市の年平均気候は15・4度ですが、夏場は蒸し暑く、真夏日を記録することもしばしば見受けられます。冬場は朝方に氷点下になることが多く、平成28年1月にはマイナス15・2度を記録するなど、寒暖差が大きい盆地特有の気候となっています。

●伊佐市の人口（平成27年10月1日）  
27,669人（13,874世帯）

●伊佐市の面積（平成26年10月1日）  
392.56km<sup>2</sup>

●市章（平成20年11月1日制定）



伊佐市の「い」をシンボライズしたデザイン。「い」の左は伊佐地方を代表する伊佐米、右は伊佐米を育む清流を配して自然豊かな豊穡の地を表現している。

## 【市の花】

### さくら

県内で唯一「日本のさくら名所100選」に選ばれている総延長2kmにも及ぶ忠元公園の桜並木、可憐な花で春の訪れを告げる樹齢600年を超える奥十曾のエドヒガン桜、双方共に全国的に有名で、伊佐を代表する花です。



## 【市の木】

### ひのき

伊佐の山々には以前から育成に力を注いできた「ヒノキ」が悠然と立っています。伊佐地方のヒノキは、材が軟らかく加工が容易で、光沢が美しく、曲がりが少ないなどの特質があり、「伊佐ヒノキ」と呼ばれる伊佐を代表する木です。



## 金の埋蔵量日本一

### 菱刈鉱山

現在、国内で商業規模の操業が行われている唯一の金鉱山。鉱石1トンあたりの金の平均含有量が33グラムという高品位で、国内の産金量のほぼすべてを占めています。坑内温泉水は湯之尾温泉や市内にある温泉施設に供給されています。



## 伊佐の文人

### 海音寺潮五郎（1901-1977）

伊佐郡大口村の生まれ。昭和11年に「天正女合戦」「武道伝来記」で第3回直木賞を受賞。代表作「二本の銀杏」の舞台となっている薩摩の北端にある「赤塚郷」は当時の大口であったと言われています。



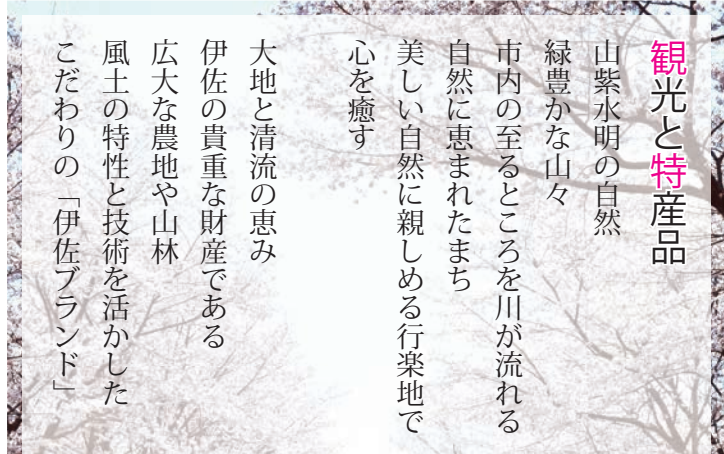




滝幅日本一「平成百景」

### 曾木の滝

滝幅 210 メートル、高さ 12 メートルの大きなスケールを誇る曾木の滝。千畳岩の岩肌を削るように流れ落ちる水流とその轟音は、訪れる人々を釘づけにするほど豪快。一帯の自然公園は、四季の彩りが美しく桜や紅葉の時期はイベントも開催されます。



### 観光と特産品

山紫水明の自然  
緑豊かな山々  
市内の至るところを川が流れる  
自然に恵まれたまち  
美しい自然に親しめる行楽地で  
心を癒す



▲イーサキング

焼酎のはじまりはここから

### 郡山八幡神社 (国文化財)

1954年に復元補修した際、「座主がけちで一度も焼酎を飲ませてくれない」という大工の落書きと永禄2年(1559年)の年号を発見。これがわが国における「焼酎」という文字の初見で、伊佐が焼酎発祥の地といわれる由縁です。



薩摩の北、米どころあり

### 伊佐米

伊佐市は県内一の生産面積と生産量を誇り、古くから「薩摩の米蔵」とされています。四方の山々から流れ込む豊潤な水と盆地特有の日中の寒暖差がつくりだす「おいしい米」は、小粒で程良い甘み、冷めてもおいしいのが特徴です。



湖底から姿を現す明治期の土木遺産

### 曾木発電所遺構

曾木の滝から 1.5 km 下流に今でも明治の面影を強く残している曾木発電所跡があります。昭和 40 年鶴田ダム建設に伴い、湖底に沈みました。現在は 5 月～9 月にレンガ造りの建物が姿をあらわします。



歴史ある温泉地

### 湯之尾温泉

1810 年頃から里人や旅人たちが疲れを癒した歴史ある温泉地です。泉質は炭酸水素塩泉で、神経痛・関節痛や冷え性などに良いと言われています。湯之尾滝上流にはカヌー場や四季折々の郷土料理が楽しめる旅館もあります。





## 編集後記

戦後70年の節目に、学童疎開を後世に語り継ぐとともに、これまで続いてきた両市の友情をさらに発展させるため、今回の記念誌発行を企画しました。

学童疎開から時は経ち、疎開児童は80歳前後になられ、受入家庭の親のほとんどが亡くなり、この機会を逃せば難しくなるこの思いもありました。

疎開体験者や受入家族のお話を聞く中で、筆舌に尽くし難い当時の生活や置かれた環境の苦しみに涙しながらも、共に生きたからこそ続く、戦後も変わらぬ交流に心が和み、改めて絆の深さを感じました。

また今回は、記念誌発行に併せて、高校生によるDVD動画の制作、交流を進めるためのシンボルマークの作成、両市共同で行った小学生の交流などにも取り組み、半世紀を超える姉妹都市の原点である学童疎開を、若い世代に知ってもらう良い機会にもなりました。記念誌を通じて、子どもたちが歴史を認識し、平和のありがたさ、命の大切さを学んでくれることを心から願っています。

記念誌発行にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます、両市が更なる友情を深め、発展していくことを祈念し、編集後記とします。

西之表市・伊佐市交流事業

戦後70年学童疎開記念誌

### つなぐー語り継ぎたい想いー

平成28年3月発行

#### 西之表市

〒891-3101  
鹿児島県西之表市西之表7612  
TEL 0997 (22) 1111

(編集委員)

田上美子 / 鮫島 齊 / 下川昭代 / 上妻俊介  
和田帆波 / 鍋木 博 / 前之園公貴

#### 伊佐市

〒895-2511  
鹿児島県伊佐市大口里1888  
TEL 0995 (23) 1311

(編集委員)

山下和弘 / 平崎祐実 / 柿ノ迫秀美  
丸田祥代

#### <参考文献>

西之表市年表 / 西之表市百年史 / 大口市郷土誌 / 菱刈町郷土誌 / 大口市三十年誌 / 鹿児島県の近現代 / 「永久保存 思い出の記-安城校疎開団-」(長野菅彦著) / 鶴木誠HP「語り継ぐ、あの時を」 / 総務省一般戦災HP「国内各都市の戦災の状況」「年表で見る戦争と空襲」 / 全国疎開学童連絡協議会HP / Web 学童疎開を語り継ぐ会HP「語り継ぐ学童疎開」 / Y-History 教材工房HP「世界史の窓」 /



